

---

# 木蘭の涙

山内 詠

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

木蘭の涙

### 【Nコード】

N7442L

### 【作者名】

山内 詠

### 【あらすじ】

戦乱の大陸の東にある慶国の人々から忘れられた王女木蘭はある日突然「西の戦狂い」と呼ばれる父程も年の離れた真国の王真亮の元へ嫁ぐことになる。不遇な身の上から期待することを忘れた王女が嫁いだ国で何かを得るまでの物語。

## 忘れられた王女 一

時は戦乱。

一つの大きな大陸の中で、幾つもの国の様々な人種の民族が争い、奪い合い、滅ぼし合っていた頃。

小さくもなく、大きくもなく、ただ地の理のおかげで大陸を覆う戦火とは遠くいられた慶けいという国に忘れられた王女がいた。

名は木蘭もくらん。

忘れられた存在となつたのは全く木蘭のせいではない。  
父である慶国王慶備けいびはすでに正妃との間に王子が2人、  
側妃との間に1人の王子と3人の王女がいた。

木蘭は王の7人目の子として、この世に生を受けた。

ほんの一時、王が戯れに手をつけた侍女が生んだ子。  
生みの母は王の子供を授かったことで一応妃として王宮に召し上げ  
られたが、木蘭を生んですぐ死んでしまった。

木蘭はただ「王の子」であると認められ王宮で暮らすことを許され  
た、それだけの存在。

身分の低い母から生まれた、何も持たない木蘭に関心を寄せるもの  
はほとんどいなかった。

誰からも見向きもされない、路傍の石の如き存在。

そう、あの日までは。

「縁談：ですか」

「そうでございます。木蘭様、王女としての務めを果たす時が参りました」

父王からの言葉を伝えにきた女官は慇懃無礼に言い放った。

王女としての務め…他国へ嫁ぎ子を成し、国と国に繋がりをつくること。

至極当たり前のことであつたが、木蘭には全く実感がわかなかつた。

何しろこの国の結婚適齢期は15歳から18歳。王族であればもっと早い者も珍しくない。

木蘭は今年で20歳、年増と言ってもいい年齢であつた。

仮にも王女であつたのに、この年まで結婚の話が無かつたのはただただ単純に木蘭は王家の女の数に入っていなかつたからである。この時期を逃せばごく当たり前の女としての幸せ  
伴侶を得て子を産み育てるという未来はほぼ絶望的であつた。

そのことを木蘭は当然の事実として受け止めていた。

木蘭が持つものはたった二つ。王の子供であるということ、身分が低い母から生まれたということ。

だから自分の一生は王宮の外れにある小さな宮とその周辺だけで終わるものだと弁えていた。

他の王族の邪魔にならないよう、ひっそりした暮らし。

出来ることといえば裁縫と読書くらい。

木蘭はそれが自分の人生の全てだと受け入れていた。

己の境遇を恨んで不満を口に出しても足掻いても改善される余地は全く無く、

また他の生活を知らないから比べようもない。

どんなに望んでも手に入らないものがあることを木蘭は骨身に沁みて知っていたのである。

しかし王女の務めを果たせと言う割にどこの誰に嫁ぐのか、肝心なことは全く告げられず、7日後にお迎えがございます、明日からご準備に伺いますとだけ早口でまくしたてると、女官は去って行った。

「晴天の霹靂とは、こういうことを言うのね」

ぽつりとつぶやくと傍らにいてくれた木蘭付きの唯一の女官である琳々りんりんが明るく答える。

「でも木蘭様、一生をこの宮で過ごすよりはいいんじゃないですか」  
少なくとも、今まで知らなかった場所に行けるのだから。

「そうね」

琳々の声に、女官に掻き乱された思考がようやく前を向く。

この明るい声や朗らかな笑顔にいつも助けられている。琳々が母から受け継いだ何よりも得難いもの。

今でこそ月が欲しいと夜空に手を伸ばすような行為は愚かだと弁え

ていたが、

幼い頃木蘭は異母兄や異母姉との待遇の差を理解できず泣いてばかりだった。

その木蘭の涙を拭き、慰め、抱きしめ、自分の立場を認め、与えられたものの中で暮らすことを教えてくれたのは乳母であった琳々の母。それどころか唯一無二の友、琳々をも与えてくれた。

木蘭にとって母とは顔も知らぬ産みの母ではなく、愛情を込めて育ててくれた琳々の母のことである。

琳々の母が亡くなったとき、二人で決めた。

泣いても笑っても一緒なら笑っていきましょう、と。

王族のはしくれであるから王宮を自由に出ることはできない。

そして何も知らないから王宮を出てもきつと生きてはいけない。

だが今木蘭に、この場所で生き、そして死ぬ以外の道が開けたのだ。例え生まれ育った王宮から他国の後宮にただ居場所が替わるだけであつても。

「琳々、嫁ぐ時は…ついてきてくれる？」

また不安げに呟くと、琳々はにっこり笑って

「当たり前でございます、琳々はずっと木蘭さまのお傍におりますよ」

と木蘭の手を握り締めた。

正直見も知らぬ相手へ嫁げと急に宣告されたというのに、木蘭の心配はそれだけであった。

琳々は生まれた時からずっと一緒にいてくれるただ一人の存在だから。乳母亡き後は王宮の隅にずっと二人で静かに生きてきたのだ。木蘭にとってこの王宮は生まれ育った場所だけど、愛着があるわけじゃない。

どこにいても二人でいられるのなら、同じだ。

「よし、じゃあお嫁にゆく準備をしなくてね」

椅子からふいに立ち上がるような気楽さで、木蘭は気持ちに整理をつけた。

どうにもならない事は考えない。自分の手に余ることも受け入れて、従うしかないのだから。

琳々が他の女官や侍女たちの噂や話を聞いて回ってくれて、出発直前ようやく木蘭は自分が嫁ぐ国と相手を知ることができた。

真国<sup>しんこく</sup>の王、真亮<sup>しんりやう</sup>。 齡40を超えているという。

「真国…確かかなり西の国ではなかったかしら」

「はい、大陸の西の端です。元々は小さな部族の集まりから出来た国だそうですね。

ただここ数年で西から蘭国<sup>らんこく</sup>・恭国<sup>きやうこく</sup>・寧国<sup>ねいこく</sup>を自分のものにしたとか」

「ここ数年って…」

木蘭は驚きを隠せなかった。書物の中でしか知りはないが、今挙げられた国はいずれもも弱小国というわけではないからだ。

「でも寧国まできたってことは…」寧国は慶国とさほど離れていない。

「そうです、長く戦とは無縁だったこの国にも迫っているんです」

「だから私が担ぎ出されたわけね」

3人の異母姉はもう既に他国や国内の貴族へ嫁いでおり、正妃の息子である2人の異母兄に王女はいたが、幼すぎた。何しろまだ5歳にもなっていない。婚約ならばともかく結婚できるような歳ではない。

つまり慶国には多少歳を取り過ぎているとはいえ未婚の王女が木蘭しかないということになる。

戦を回避するために、婚姻で絆を作る…それは王家の女性にとってごく当たり前のことではあった。

親子ほども年の離れた男と娶わせられるのも、よくある話だ。

「でも…木蘭さま…」

琳々が全てを言わなくても察しはついた。

女官が詳しく語らなかつた理由。友好国に嫁いだ異母姉とは明らかに違う。

木蘭はていのいい人質である。

それも慶からすれば失っても全く構わない存在。形だけの人質。破竹の勢いで国を飲み込んで巨大化していく真という国に慶は木蘭という人身御供を捧げることで戦を回避する道を選んだのだ。人質



とわかっていても、木蘭にはどうしようもない。父である王に嫁げと言われれば従うしかないから。

「真王は『西の戦狂い』と言われるほど戦が好きなんですって…。今まで一度も戦で負けたことはないとか…」

琳々が周囲に聞けば聞くほどに血みどろの恐ろしい噂しか耳にしなかった。

戦場においては鬼神の如く、軽々と人の首を刎ねるという。

こんな者のもとへ嫁げという慶国王に久しく忘れていた怒りがこみ上げてくる。

話を聞いたとき、軽々しい事をいうべきでなかった。

琳々にとっても木蘭は唯一無二の存在。

琳々は木蘭の乳母であった母を亡くし、続いて父を病で失った時、一生を王宮…いや木蘭に捧げる覚悟を決めた。

母が守ったこの不遇な王女を生涯支えていくつもりであった。

ただでさえ王族として最低の扱いをされているというのに、これ以上悪いところへ行けと言うのか。

暗い怒りが胸にせりあがる。

しかし木蘭はにっこりと笑うと琳々に明るく言った。

「大丈夫よ、逆にそんなお年ならきつと既に他の妃さまやお子様がいらっしゃるわ。」

戦好きなら王宮にずっと留まっている方でもないでしょうし。

……なら私のような者は捨て置かれるわ」

人質ならば生きてそこにありさえすればいいのだから。

「それならここでも真国でも一緒にしよう」

「そうですわね、木蘭様」

顔を見合わせると木蘭と琳々は声を上げて笑った。

望まれず生まれ誰からも必要とされてこなかったが、捨て駒としてならば必要としてもらえた。

それで十分ではないか。少なくとも、王女として認められたのだから。

泣いても悲しくても悔しくてもどうしようもないなら笑ってしましよう。

これも二人で決めたこと。

涙はとっくの昔に枯れ果てていた。

## 忘れられた王女 二

あつという間に嫁ぐ日はやってきた。

嫁ぎ先の国へは馬車で3ヶ月の道のりだという。

木蘭が自らの縁談を知ったのは7日前。随分と直前に知らされたものだ。

「…遠いわねえ」

「まあ慶国は東の端ですし、真国の首都はだいぶ西のほうですから」

他人事のように呟いた木蘭に琳々は窓の外でもご覧下さいなと明るく言くと、締め切っていた窓を開けた。とたんに強い緑のにおいが入り込んでくる。整えられた王宮の庭園では感じる事ができなかったものだ。規則正しく響く蹄と車輪の音が心地よい。

嫁ぎ先からの迎えの馬車は4頭だての大型のもので何の装飾もない無骨な造りであった。

迎えの馬車はそのたったの一台だけ。あとは従者用のもの。

その迎えの一行を見た瞬間、木蘭は自分が今後どういった立場に置かれるかすぐに理解した。

望まれて、嫁ぐわけでは決して、ない。改めてそのことを実感させられた。

通常どんな小国の王女であっても嫁ぐときに馬車1台では到底足りない。

同行する侍女や女官を乗せたり、持参する衣装や装飾品、身の回りの道具など荷物は多いからだ。

確か木蘭の異母姉の時は大型のものが10台ほど必要だったはずである。

仮にも王の妃として迎えられるのであれば、たった一台だけで済まない。

慶国やこの近隣諸国では嫁ぐ時に夫となる人が妻の家まで馬車で迎えをよこす習慣があり、嫁入り馬車の行列は迎える側の経済状態や態度を顕著に表すものでもあったのだ。それを真国側が知らない訳がない。

無骨な造りの馬車に揺られながら、王宮を出てくる時のことを思い出す。

鮮やかな婚礼衣装に身を包み、住み慣れた王宮を後にしても何も感情は浮かんでこなかった。

生まれて初めて乗った馬車で王宮の門をくぐり、外へ出ても、振り返る気すらおきなかったことで、木蘭は不思議と心が凪いでいた。

本当に私は、この生まれ育った国に何も期待していなかったんだ。

木蘭たちの婚礼の準備を手伝ってくれた女官や侍女たちはこんな粗末な馬車でお気の毒にとしきりに同情してくれたけれど、そもそも木蘭たちの荷物はとも少ないし、同行するのは琳々だけだ。

王女として嫁ぐのだから、父王は何人か侍女を同行させてくれようとしたが、それは木蘭が断った。

嫁ぐ王女に同行する侍女や女官は基本的に王女が何らかの事情で戻ってこない限り、帰って来られない。

故郷に二度と戻れない、そんな不幸な者を増やしたくなかったから。

おざなりに用意された衣装や装飾品はどうしても必要と思われるものの以外は全て置いてきた。

これから木蘭は他国の人間となるのだから、祖国の物はもはや必要ない。

そうなると大型の馬車は女二人だけの旅には広すぎるくらいであった。

飾りのひとつもついていない馬車ではあったが、乗り心地は悪くなかった。むしろかなりいい。

道が悪いところでは揺れたが、従者がそういう場所にさしかかる前に教えてくれたし、きちんと座っている分には問題無い。初めての馬車の旅は不安もあったけれど、馬車酔いもさほど辛いものではなかった。

座席は柔らかく肌触りの良い布が敷かれ、振動を和らげるためかたつぷりと綿が詰められている。

羽入りの絹の寝台も整えてあった。

備えられた調度品には湯浴み用の桶や香りのよい最高級の石鹸、食器も一目で高価とわかる磁器や銀製のもの。

逆にこれらは王宮に住んでいた時にはほとんど縁が無かったものだ。たった一台の馬車で迎えに来るくせに、中身は大変に豪華なものであった。

理由を従者に問えば彼らは銜いもなく「華美な外装ではよからぬ輩を引き寄せますので」と簡潔に理由を述べた。確かに何十台もの集団ならば兎も角、たった2台の馬車であれば盗賊等を警戒するのは当たり前である。

それ故か真国王の名代として木蘭を迎えに来たのは篤翼とくよくという名の軍人であった。

年は30歳前後であろうか。背はそんなに高くなかったが鍛えられていると一目でわかる身体に褐色の肌と、短く刈り上げた小麦色の髪、薄い茶色の瞳をしていた。

篤翼が馬車と平行して馬を走らせていると窓からチラチラと女官の姿が見えた。

本人はせいっぱいこっそりこちらを伺っているようではあったが、窓に顔を近づけると髪に飾った簪が日の光に反射して光るので、すぐにわかるのだ。

「私のような者が珍しいですか？」

こちらを伺う様子がなんだかおかしくて、休憩の際馬車から降りてきた琳々に思わず声をかけてしまった。

声をかけられた琳々は最初は真っ赤になってうろたえたものの、ひとつ深呼吸をすると逆に問い返してきた。

「真国の方はみなあなたのような容貌なのかしら？」

慶国ではほとんどが黒髪に黒い瞳、肌は白に近い象牙色である。

髪や瞳、肌の色が違う民族が存在することは知識として知っていたが、木蘭と琳々が実際に異国の民を見るのは、篤翼と従者たちが初めてであった。

慶国は地理的な点からほぼ特定の国としか親しい交流が無いために街中や王宮に異国の民がいることは皆無であった。だからこそ今まで戦とは関わり無くいられたのだ。

「いいえ、そうとは限りません。一番多いのは私のような髪と肌ですが、黒髪のものもありますし、赤髪のものもありますよ」

「赤！ 想像もつかない！」

「真は元々別々であつた12の部族がまとまってできた国ですからね。色んな民がいます」

「一番多いということは真国王陛下も、あなたと同じようなのでし  
ようか？」

「同じと申し上げるのはとても恐れ多いのですが、真国王陛下は金  
の髪に香緋色の肌であらせられます」

「香緋？」

首をかしげると結い上げたまっすぐな黒髪がさらり、と揺れる。  
篤翼はああ、慶では飲む習慣がないのでしたねと深い赤の混じった  
茶色ということですよと言ひ直した。

「香緋とはお茶の一種でとてもよい香りがするのです。葉ではなく、  
種を炒つた物を煎じて飲みます」

良い香りのお茶、と聞いて琳々は瞳を輝かせる。辛い旅の途中の慰  
めとなるものはなかなか無い。

「是非木蘭様に差し上げたいわ！」

「では次の休憩の時にお持ちしますよ」

期待に満ちた笑顔で言われれば、そう応えざるを得ない。

半ば社交辞令のような篤翼の言葉に気付かず、琳々はありがとう、

と満面の笑顔で礼を述べると跳ねるような足取りで馬車へ戻っていた。

その姿がなんとも可愛らしく、おかしかったので篤翼は思わず笑ってしまふ。

琳々は篤翼が知っている王宮仕えの女官の印象とは全く違う女性であつた。

木蘭の年齢が20歳ということであつたので、恐らく同じくらいの年齢であろうに、明るい屈託の無い笑顔が年齢よりも幼い印象を与える。

丸顔にくりくりとしたつぶらな黒い瞳がそれを助長していた。

馬車の窓が開いているときは琳々と木蘭の楽しげな話し声がよく聞こえた。

慣れぬ馬車での道のりは辛いものであるだろうに二人は常に笑顔を絶やさない。

穏やかに微笑む王女と只一人明るく笑う女官。

まるで一对の鈴のように、彼女たちは共にあつた。



### 忘れられた王女 三

「木蘭様、篤翼殿が香緋を入れてくださいましたわ」

白い茶器に入れられた香緋のふくよかな香ばしい香りが馬車の中に広がる。

「あら、嬉しい！ それにしても本当に不思議な香り」

「ちよっぴり苦いですけどね」

「そうね、でも蜂蜜を入れると、すつごくおいしいじゃない」

香緋のよい香りに包まれながら二人はまた鈴のような声で笑い合う。初めて飲んだ異国のお茶をとても気に入ったと伝えると、篤翼は度々香緋を入れてくれるようになった。

それは申し訳ないから琳々がいれ方を覚えると言ったのだが、香緋は普通の茶と違って特別な手順や道具が必要らしく、難しいので道中では私にお任せ下さいと言われてしまった。

「首都では香緋を入れる専門の資格まであるらしいですわ」

「そんなに難しいもののね」

琳々は篤翼と香緋を通じてすっかり仲良くなったらしい。

香緋を差し入れてくれる時などによく話をしているようだ。

篤翼から聞いたという真国のことをあれこれ教えてくれる。

春夏秋冬、季節の移り変わりがはつきりしている慶国と乾季と雨季

によつて季節が替わる真国との気候や風土の違い、食べ物の違い等、真国でこれから暮らしていくのに役立つであろう知識。

遠い異国のそのどれもこれもが今まで書物でしか世の中を知らなかった木蘭の興味を惹いた。

直接篤翼に話を聞きたい、と思つたけれど身分の差と言われれば仕方がないが、篤翼や他の侍従たちは木蘭に対して礼を崩そうとはしてくれないから木蘭から気楽に話しかけることなどは出来なかった。必然的に彼らと話すのは琳々であつたが、ただ必要な情報を交換するのではなく、あまり打ち解けていない人とも楽しく会話を交わすことができるのは琳々の持つ魅力のひとつだ。

やっぱり琳々は笑顔にはみんな心を許してしまうのだわ。

我を殺すことを早くに覚えてしまった木蘭にとって、感情が素直に顔に出る琳々を時々羨ましく思わないと言つたら、嘘になる。

でも自分の代わりに怒り、泣き、そして一緒に笑い合つてくれる。大切な、大切な存在である琳々が他者に好かれているところを見るのはまるで自分の大切なものを褒められているようで嬉しかった。今まで他の人とは関わらないように生きてきたから、余計そう思うのかもれない。

他人の手を煩わせることが木蘭は何よりも苦手だつた。そんな木蘭の気持ちをいつも察してくれるのはずっと一緒にいてくれた琳々だけだ。

もちろん同じように琳々も木蘭をとて大切に思つていた。

母が手中の珠のごとく慈しみ愛した王女に、娘として嫉妬することもあった。

でも木蘭は硬い殻に閉じ込められている心を琳々だけに見せてくれる。その信頼に応えたいと強く思う。だから琳々は笑うのだ。

木蘭に笑つていてほしいから。

そんな二人の絆は他者から見ても明らかだった。

男でも3ヶ月も馬車に揺られ続ける旅は楽なものではない。

天気の良いで予定の宿所へ辿りつけず野宿した時も、火が使えず湯浴みすることが出来なくても、彼女たちは何も言わなかった。それどころか一切愚痴や不満の言葉を口にしなかった。

酷く揺れる馬車の中でお互いを労わり合い、励まし合い、笑い合う。侍従たちへの気遣いも上っ面の言葉だけではなく何か手伝えることがあれば、と王女らしからぬ言葉と態度で示してくれる。

篤翼は当初冷静に彼女たちを見ていたが、いつの間にか二人の笑い合う姿を眺めるのが楽しみになっていった。

彼だけではなく従者たちも同じように二人の姿を微笑ましく眺めていた。

そして旅がもう少し続けばいいのにと思わずにいらなかった。

真国の使者である彼らはこの旅の終わりが決して幸せな結末ではないということを知っていたから。

何事もなく馬車は進み、慶国を出発して3ヶ月後、真国首都或範へと辿り着いた。

## 覚悟 一

真国の首都或範は小高い丘の上にある。

中心に王の座する宮殿があり、周囲を取り囲むように放射線状に街が造られているが、

王宮までまっすぐに行ける道はひとつも無かった。

敵が攻めてきてもすぐに王宮まで行けないよう故意に複雑に造られているのである。

いくつもの道をまるで蛇行するように曲がり時には引き返ししつつ、馬車は王宮へ向かった。

街へ入る門をくぐる前に馬車の窓は外から閉められた。

石畳を走る蹄と車輪の音だけが馬車の中に響く。

王宮に到着すればすぐに王との対面が予定されていたため、琳々は念入りに木蘭の支度を整えた。

「ついに真国王陛下と対面ですわね」

「そうね……、どんなお人かしら」

篤翼に何度も真国王についてそれとなく尋ねてみたが、なぜか篤翼は言葉を濁しあまり詳しく教えてはくれなかった。結局真国王についてわかつているのは金色の髪と香緋色の肌をしている、というだけである。

「…どんなお人でもきつと大丈夫よ」

木蘭は琳々に笑いかけた。

「そうですわね」

琳々も笑い返す。

慶国での暮らしは決しているものではなかった。衣食住が足りていて、ある程度の教育も受けて、明日の心配など無い生活。

それは一方からすればかなり恵まれた生活ではあった。

しかし木蘭は王宮ではほとんど存在しないものとして扱われていた。存在を否定され続けることは、満ち足りた暮らしと言えるであろうか。

空気のように扱われることがどういうことか、木蘭と共にいた琳々は身に染みて知っている。

きつと真国でも、同じように扱われるのだろう。

ならばきつと大丈夫だ。

今までもずっとそうだったのだから。

ふいに、馬車が止まった。

「王宮に到着いたしました」

篤翼が硬い声で告げる。

来る時がついに、来たのだ。

琳々に手をひかれて馬車を降りると、

そこは白い玉砂利が一面にひかれた広場であつた。

目の前に朱塗りの大きな門があり、大理石の敷かれた道が続いている。

しばらく馬車の窓が閉じられていたので、日の光が眩しくて、

木蘭は立ち止まり目を閉じた。

ここが、これから暮らす場所。

そして一歩踏み出そうとすると傍にいた篤翼が抑えた声で呟いた。

「……どうか陛下のお言葉の通りになさってください、お心を強く持って」

問い返そうと篤翼の顔を見ると篤翼はわずかに首を横に振る。

本来ならば、言うてはならない言葉なのだろう。

木蘭は眼差しだけで頷くと琳々と共に門をくぐった。

先導に従って連れて行かれた先は小さな広間であつた。

なぜか先客が2組いる。ここはどうやら待合室のようだ。

先客の2組は栗色の髪をした12・3歳くらいの女の子と黒髪の15・6歳の男の子だった。

どちらも3人ほどの付き人を連れている。

ここまで先導してきた真国の官僚とは全く雰囲気違った。

おそらくこの2組も木蘭と同じ目的で

真国へ連れてこられたどこかの国の王族であろう。

「それでは皆様お揃いになりましたので、国王陛下の元へご案内致します」

どうやら木蘭たちが一番最後だったらしい。

お付きの方々はここでお待ちください、と告げられた。

木蘭は琳々と視線を合わせると、大丈夫よという気持ちを込めて微笑んだ。

他の2人と共に先導に従って部屋を出ると長い廊下を何度も曲がり、進む。

建物の中も街と同じように侵入者を防ぐために複雑な造りになっているらしい。

廊下には装飾の類は全くなく、黒く光る漆塗りの柱に白い塗り壁が延々と続く。

どのくらい歩いたか判らなくなってきた頃、不意に大きな黒い扉の前に辿り着いた。

「臨国王女臨秀梅様、博国王子博宋伯様、慶国王女慶木蘭様、お着きになりました」

先導の官僚が静かだがよく通る声で告げると、大きな黒い扉が音を立てて開かれた。

## 覚悟 二

扉の中は廊下まるきり違う、一面に赤い絨毯が敷かれた大広間であった。

正面の3段ほど高い位置に豪華な朱塗りに金をあしらった椅子が見える。

その椅子の周囲には鉾を持った兵士が並んでいる。

これがおそらく玉座であろう。

「これから国王陛下がおいでになります」

先導役の官僚の言葉に木蘭は膝をつき、

右手に拳を作り左手のひらで覆い頭の上にあげ、頭を下げた慶国での最敬礼をした。

目の端で周囲をうかがうと、共にやってきた臨国の王女と博国の王子も

それぞれの国のものと思われるやり方で跪いている。

見てわかるくらいに震えている臨国の王女に気を取られていると、靴音と共に誰か部屋へ入ってきた気配がした。

「面を上げよ」

その言葉に3人がゆっくりと頭を上げると目の前に

玉座のひじ掛けに頬杖を付きながらこちらを見ている真国王がいた。

篤翼が教えてくれた通り、金色の髪に香緋色の肌をしている。

簡素な黒い衣をまとっているだけで冠はおろか、何の装飾も身につけていない。



歳は40を超えているという話であつたが、実年齢よりもはるかに若く見えた。

30歳をいくつか超えたくらいにしか見えない。

ただ、口の端を少しだけ歪めて笑いながらこちらを見るその表情から弾けるような瑞々しさではなく、熟成された狡猾さが透けて見えた。それだけが一見ただの青年のように見える真国王を只者ではなくしていた。

「では、脱げ」

木蘭は、言葉の意味が理解できなかった。

挨拶も何もなく、脱げとは…この衣装をだろうか。

隣にいる2人も戸惑いの表情を浮かべたまま真国王を見つめている。

「おや、耳が遠いようだな。脱げと言つたのだ。

その身につけているご立派なものを全て脱いでみせろ」

低く喉の奥で笑いながら真国王はもう一度言つた。

臨国の王女はもうその震えを隠そうとはしなかった。いや、抑えられなかった。

博国の王子も同じように震えていた。

この場には真国王だけがいるわけではない。

廊下に面した扉は開かれたままだし、

王の傍には補佐の官僚や身を守る兵士が何人もいる。

王族が裸になるのは然るべき場所であらうべき時のみであり、

公衆の面前で裸や下着姿になるのは、罪人として処刑される時である。

真国王が要求していることは、王族として生きてきた者に対する最大級の恥辱であった。

出来なければ、どうなるのか。

少なくとも自分がどういう立場で真国へ来たかということを経臨国の王女も博国の王子もわかっているはずである。それでも身に染みついた王族の常識が枷となり、身動きが取れないのだ。

…どうか陛下のお言葉の通りになさってください、お心を強く持つて。

篤翼の言葉が脳裏に蘇る。彼は知っていたのだ。木蓮が馬車から降りた後どういう扱いをされるかを。

だから、教えてくれた。どうすればいいのかを。たった3ヶ月、一緒に旅をただけなのに。

「どうした、出来ぬのか」

嘲笑っていた声が、ふいに低く重いものになる。その時木蘭の背筋にぞくりと何かが走った。

場の空気が変わるのがはつきりとわかる。

真国王の表情は全く変わらない。

だが対峙していた3人にだけは見えていた。  
その後ろに揺らめく黒い炎の幻が。

ただ王族として安穩と育てられた者が決して持つことのないもの。

見せつけられたのは幾つもの戦を経て自らの手で欲しいものを勝ち  
取ってきた

本物の強者の力の片鱗であつた。

ただそこにありさえすればいい、と思っていた嫁ぐ前のことが頭を  
よぎる。

人質として形だけの妃になるだけなど、どうして思えたのだろう。

悪いことに底など、無いのだ。

「失礼致します」

立ち上がる非礼を詫び、木蘭は自らの衣装に手をかけた。

深紅に金系の刺繍が施された外掛けを脱ぐ。

帯を解き、衣を剥ぎ、下着まで一気に取り去った。

足元に山となった衣装を跨ぐように一歩踏み出すと、  
屈んでその足に履いていた沓も脱ぐ。

そのまま髪を飾る簪を、一本づつ引き抜き、頭を振って結い上げら  
れた髪をも崩した。

「仰せの通りに致しました」

文字通り一糸纏わぬ姿となって、木蘭は真国王に向き合った。

そして身に纏う全ての衣を脱ぎ去った木蘭を、

真国王真亮は感情のこもらぬ笑みを浮かべながら眺めていた。

なめらかで透き通るような象牙色の肌。

艶やかなまつすぐな髪。

素甘のように柔らかかそうな肉のついた身体。

警護の兵士が何人か、わずかに顔を動かし、目をそらしたのがわかる。

20歳の女の裸、それも極上のものを見て、平坦な心でいられる男は少ないだろう。

さらに異国の王女ともなれば尚更。

まっすぐにこちらを見つめてくる娘ほども年の離れた王女の瞳に在る感情は、怒りか、憎しみか。

ゆっくりと木蘭の裸体を上から下まで堪能した後、それを探るべく真国王は木蘭と視線を合わせた。

視線を合わせても、木蘭は全く瞳をそらそうとはしない。

静かに佇んだまま、じっとこちらを見つめている。

そこに何かしらの感情を窺い知ることはできなかった。

面白い。

口の端を歪めて嘲笑うと、木蘭から視線を外し傍らに控えている侍従へ合図を送る。

侍従たちは怯え震える臨国の王女と博国の王子を抱えるようにして立ち上がらせた。

「私の言葉が聞こえないものに用は無い」

その言葉に博国の王子は我に返ったように服に手をかけたが、侍従に阻まれ部屋から引きずり出されていった。

臨国の王女は既に自らの足では歩けない状態であった。

2人が部屋から出された後、警備の兵士と官僚がそれに続き部屋を出て行き、

扉が今度はゆっくりと静かに閉められた。

すると今まで兵士の後方に控えていた女官が木蘭へ近づき、裸体を隠すように衣を着せた。

今まで着ていた慶国の意匠のものではない。

さらりと乾いた感触から、絹や綿ではなく、

麻の生地を使ったものであると木蘭は思い至る。

日差しが強く、乾燥して雨の少ない大陸の西で重宝されるのは麻の衣服だとかで読んだことがあった。

女官にされるがままに着せられていると、

木蘭が気づいたときすでに真国王がすぐ目の前にいた。

そして崩れ乱れた黒髪をひと房手に取ると、

また木蘭と目をしっかりと合わせ、言った。

「慶国王女慶木蘭。 我に仕える覚悟はあるか」

覚悟。

不思議なことを訊くものだ。

木蘭が真へやってきたのは父王に命じられたからで、好き好んで来たわけではない。

そもそも木蘭の人生の全てにおいて、木蘭に決定権はひとつもない。

王女として生まれたのも、

空気の如き存在として扱われたことも、

真へ嫁いで来たことも、

全て自分以外の誰かが決めたことだ。

生まれてから今日まで、自分が自分のものであった時など一時もない。

そのことを当然の事実として受け止めていたからこそ、今、目の前で衣を脱いだのだ。

王族にとって死にすら値する恥辱すらも、木蘭の持ち物ではない。

「この地、この宮殿へ足を踏み入れたときから、私は真国王陛下のものです」

そして嫁いだからには、自らは夫のものであると木蘭は理解していた。

木蘭の言葉が予想外であつたのかもしれない。

真国王の顔から、口の端を歪める笑みが消えた。

手に取つた黒髪に恭しく口付けると、真国王は言つた。

「ならばそなたは今日この時から私の妻だ、木蘭」

### 覚悟 三

どれほどの時間が過ぎただろう。

時を計るものがどこかにあればいいのに。

琳々は振り払っても振り払っても湧いてくる不安と必死に戦っていた。

はなから木蘭が傷つくだけだとわかっていても、せざるを得なかったことは今まで幾度もあった。

慶国での暮らしはまさに傷つけられることが当たり前の毎日であった。

ただその傷がどれほどの威力を持っていて、いつつけられるものかはつきりとわかっていたから対処が出来た。それだけである。

同じように主を待つ他の付き人たちも次第に苛立ちや戸惑いを隠さなくなっていた。

待っているからこそ、余計に長く感じるのだと頭ではわかっているけれど。

その時扉がふいに開いて、先ほど先導を務めていた官僚が姿を現した。

官僚に続いて侍従に抱えられるようにして

栗色の髪の子と黒髪の男の子が運びこまれてきた。

栗色の髪の子は顔面蒼白で自分の付き人の顔を見るとその場に倒れこんでしまった。

黒髪の男の子もまともに歩けないほどに震えている。  
だが木蘭の姿は無い。



「何が、何があつたの!？」

もう琳々は黙っていることが出来なかった。

他の2人の様子を見れば、何か考えるだけでも恐ろしいことがあつたことは間違いない。

「木蘭様は、木蘭様はどうされたのです!？」

先導を務めていた官僚に掴みかからんばかりの勢いで詰め寄っても官僚は琳々には何も答えず、他の者たちへ向かつてはつきりと言つた。

「臨国王女臨秀梅様ならびに博国王子博宋伯様は国王陛下の言葉に従えないようですのでこの国にお迎えするわけにはまいりません。どうぞ、お引き取り下さい」

官僚と向き合っていた琳々は思わず振り返つた。

臨国と博国の王族であつたのか。

どちらも慶と同じ大陸の東側に位置する国である。

臨国王女は氣を失つたままであり、

博国王子もほとんど茫然自失といった体で震えている。

王の言葉とは…一体何を命じられたのか。

慶国での扱いなんて、なんて生易しいものであつたのか。

まるでここは虎の棲む穴だ。

その研がれた牙と爪は容赦なく木蘭を傷つけたのだ。

琳々が絶望に目がくらんだその時。

「慶国王女慶木蘭様は国王陛下へ忠誠の証を立てられました。  
よって陛下の妃と認められました」

背後から静かに告げる官僚の声が聞こえた。

しかし琳々が待つ一室に木蘭が戻ってきたのは臨国と博国の一行が  
去ってから

また長い時が過ぎてからであった。

天高い位置にあった太陽も、だいぶ傾いている。

「木蘭様!!」

女官に連れられた木蘭を一目見て、

琳々は椅子を蹴飛ばすように立ち上がると木蘭の元へ走った。  
奪うように木蘭を女官から引きはがし抱きしめる。

琳々が着せた婚礼衣装ではなく、女官たちが着ているものとよく似  
た意匠の衣と

簪がひとつもついておらず簡素にまとめられた髪。

それだけで琳々は木蘭の身に何がおこったか、おおよそ察しがつい  
てしまった。

女に生まれた者が男に生まれた者から受ける最たる暴力。もしもそうでなくとも、類似したことを強要されたことは間違いない。

でなければ、人前で衣装を脱ぐなんてことはありえないのだから。

「申し訳ございません、私が…私が…」

力いっぱい木蘭を抱きしめながら、琳々が咽び泣く。

琳々が付いていったとしても、何かできたわけではない。

それは琳々本人もよくわかっていた。

でも、何の手助けもできない無力な自分が情けなくて、悔しくて、涙はあふれる。

木蘭は琳々の背中にそつと手を回すと、ゆっくりと撫でさする。

「琳々、誤解しているわ。私は何にも酷いことをされてないのよ」

「でも、でもっ…！」

「お願いだから、笑って琳々。あなたの笑顔が見たいの」

木蘭は微笑んでいた。

その笑顔を見て、琳々もようやく笑う。

泣き笑いの琳々を見て、木蘭は声をあげて笑った。

「琳々、酷い顔をしているわ。せつかくの化粧が台無し」

「木蘭様こそ、御髪、大変なことになってます」

二人は顔を見合わせると、また大きく声をあげて笑った。

泣いても悲しくても悔しくてもどうしようもないなら笑っていきましょう。

二人で決めたことだ。

ここで、二人で生きていく。きっと笑いは絶えないだろう。

## 新しい妃 一

木蘭と琳々が再会していた頃、真国の王宮は大変な騒ぎとなっていた。

何しろ王が20年ぶりに妃を迎えるのである。

真国王が最初の結婚をしたのは、まだ王になる前、10代の頃である。

相手は前真国王の宰相を務めていた者の娘。

互いの父が決めた縁談であつたが仲は睦まじく、2人の王子も授かつた。

だが妃は2人目の王子を出産する時長く苦しみ、そのまま命を落としてしまった。

それから20年、真国王は後添いどころか一人寝を一時慰める女すら傍に置くことはなかった。

唯ひとりを一途に愛する者の物語は美談ではあつたが、彼は只の男ではない。

真国の王である。

王に仕える者たちは皆、王に安らぎを与える者が必要だと思つていた。

真国王は王であると同時に戦う者でもある。

男が戦場で滾らせた血を鎮めるのは女の役割であるからだ。

真国王は己の妻という立場にある女以外にその役割を求めない。

ならば新たな妃を迎える他に手立てはない。

そして周囲が妃を迎えることを強く勧めたのにはもうひとつ理由がある。

既に大陸の半分を掌握している真国の王に最も近い地位。

真国王妃の座は大陸中の国々の垂涎の的であつたからだ。

さらに真国王の2人の息子もまだ正妃を娶っていない。

そのためなんと真国にやってくる他国の使者の半数以上が王とその息子への婚礼の申し込みという状態。

この婚礼の申込への返答だけでも大変な業務であつた。

長い間理由も無く申し込みを袖にし続けたため真国王は実は男色家なのではないかという噂までたつ始末。

事実、王女ではなく王子を差し出してくる国も珍しくなかった。

そして王族のみならず、名の通つた多くの美姫たちも真国王の寵愛を求めて王の元へ集つたが、王は姫たちの舞いや歌、その奏でる音色を愛しても、

それ以外を必要とはしなかった。

忠臣たちは様々な手段を用いて真国王を説得し続けたが、真国王は頑として受け入れなかった。

そんな王が、妃を娶る。

しかも追い返すためにわざわざ迎えた国の王女を。

騒ぐなという方が無理である。

お世話させて頂きます、とにつこり笑って頭を下げた湯殿の女たちに木蘭は散々に磨きたてられていた。

馬車の旅では洗い桶で身体をすすぐ程度しかできなかったから、湯につかることができるのは単純に嬉しい。

しかし王族とはいっても名ばかりの生活を続けてきた木蘭にとって、他人の手で入浴するということは、何とも落ち着かない時間であった。

他人に洗ってもらうのなど幼子の時以来である。

苦手だから、と逃げようとしたが湯殿の女たちはにつこり笑うだけでその手を休めることは無い。

色とりどりの花と香草を浮かべた湯船につかった後、たつぷりと泡を着けた海綿で身体の隅から隅までなぞるように洗われ、水気を拭かれたら芳しい香油を擦り込まれる。

髪は目の粗い櫛で丁寧に梳られ、綿の布で乾くまで丹念に拭われた。さらに顔には杏と薬草それと卵白で作られた軟膏まで施された。

木蘭にとっては少々疲れる入浴であったが、琳々は磨きたてられた木蘭を見て、うつとりと呟いた。

「やつぱり杏の軟膏を塗って流すとお肌の輝きが違いますね！」

それというのも、今まで琳々は木蘭に美しく綺麗でいて欲しくて工夫して様々な美容を施してきた。

しかし慶国では薬草ひとつ満足に手に入れられない状態だった。

だから木蘭に王族としてふさわしい手入れがされたことが単純に嬉しいのだ。

「そうかしら……自分ではよくわからないけれど」

木蘭もやはり若い娘である。

気ごころの知れた琳々から褒められれば嬉しい。

二人はまた鈴を鳴らすように笑いあった。

そんな二人のやりとりを湯殿の女たちや着替えを手伝う侍女たちはしつかりと見ていた。

なにしろ木蘭と琳々はこの王宮の時の人である。

一挙手一投足全て見られていると言っても過言でなかったが、二人は全くそんなことを気にする風でも無く笑い合う。

湯殿から出ると、王宮の西殿まで案内された。

今後はこの西殿で暮らすことになるという。

こちらでどうぞお寛ぎくださいと通された部屋には湯気の立つ食事が用意されていた。

豆腐に味噌を塗って焼いた前菜や、鶏肉に醬を塗って香ばしく焼き上げたもの、干した魚を土瓶で蒸したもの、野菜を酢で和えたもの、米から作られた酒…。

卓に並んでいたのは慣れ親しんだ慶国の料理であった。

席に付けば給仕の女官が玻璃の杯に果物から造られた甘い発砲酒を注いでくれる。まさに至れり尽くせり。



料理を一通り平らげ、食後のお茶が供される頃、先触れの女官がやってきた。

「これから国王陛下がおいでになります」

美味しかった食事の余韻は、どうやら味わえそうになかった。

## 新しい妃 二

先触れの女官が来てすぐに真国王が木蘭の部屋へ訪れた。木蘭は急いで椅子から立ち上がり、最敬礼をとる。

「申し訳ございません、このような姿で御前にあることをお許しく  
ださい」

何しろ湯を使った後で化粧もしておらず、部屋着である。

木蘭の覚えている王族の常識からいくと先触れから間を置かずに相手の元へ訪れるのは、特に女性相手では大変な無礼であったが、なにしろ相手がこの国の王ならば非難もできない。

「かまわぬ。そなたの飾り立てた姿を見に来たわけではない」

真国王は身頃がたつぷりとられた謁見と同じように黒い飾り気の無い衣をまとっていた。

部屋の中を一瞥すると、卓の上に置かれた茶器に目を止め、言う。

「なんだ、茶など飲んで。酒を持て」

平伏していた給仕の女官たちが酒肴を整えるために動き始める。

真国王は長椅子に音を立てて座ると硬い表情で礼を崩さない木蘭へ言った。

「まあそつ畏まるな。座れ」

「…失礼致します」

今まで座っていた椅子に座ろうと立ち上がる。

「ああ、ここにな」

指し示したのは長椅子、真国王の隣だ。

「恐れ多いことでございます」

「我の言葉が聞けぬか？」

その言葉に木蘭が伏せた顔を上げると目の前にはあの、口元を歪める笑みが浮かんでいる。

「申し訳ありません」

どうやら謙遜は通じないようだ。

木蘭は謝罪の言葉を述べると、真国王の隣へ腰掛けた。

座ると琥珀色の液体が入れられた玻璃の盃が運ばれてきた。

木蘭にも真国王と同じものが渡される。

真国王は捧げられた盃を水を飲み干すように一気に喉へ流し込んだ。とたんに鼻を刺すきつい匂いがする。どうやらかなり強い酒のようだ。

少し眉を動かした木蘭に真国王は「火酒は好きではないようだな」とつぶやくと、

「炭酸水で割ってやれ」と木蘭のもつ盃を取りあげると女官に渡した。

しばらくすると琥珀色の泡の立った杯が運ばれてくる。

「これなら飲みやすいだろう。飲め」

手ずから杯を渡されて拒否などできるはずもなく、そのまま口をつけると、

酒独特の苦みと共に柑橘のさわやかな香りがした。

先ほどの匂いから想像したような味ではなく、確かに飲みやすい。

「……美味しいです」

「そうか」

満足そうに呟くと真国王はまた盃を勢いよく空ける。

間近で見る真国王は不思議な雰囲気を持っていた。

張りのある肌からはとても40歳を過ぎているとは思えない。

見知った篤翼の褐色の肌より赤味を帯び、確かに香緋の色によく似ている。

表情が動いたびにわずかによる目尻の皺だけが年齢を感じさせた。

続けざまに3回盃を空けてやっと真国王は盃を卓へ置いた。

木蘭はまだ杯の中身を半分も飲んでいない。

「あまり酒は得意でないようだな」

真国王は木蘭の持つ杯をその手から取りあげると一気に飲み干し、これも卓のへ置いた。

それを合図に女官たちは静かに部屋から出て行く。

琳々も人払いの意図を察したようで、木蘭へ目礼すると他の女官たちと共に出て行った。

扉が音もなく閉じられると、真国王はひじ掛けに頬杖をつき、首を回して木蘭と顔を合わせ、問うた。

「さて、お前は本当に慶国王女慶木蘭か？」

真国王の問いは木蘭の存在の根幹を揺るがすものであった。

「……私には、それを証明するすがございません」

知らず指が震えるのがわかる。

今杯を持っていなくてよかった、と他人事のように思う。

その身に王族としての証が刻まれているわけでもない。

誰かが「この娘こそ慶木蘭である」と保証してくれるわけでもない。慶国の王族だとわかる確固たるものを木蘭は持っていなかった。

強いて言えば、漆黒の髪と瞳であろうか。

しかし慶国の民であれば皆、ごく当たり前に持つ特徴を王族の特徴と言ふことはできない。

王女の偽物を仕立てあげ、大国である真へ媚び諂おうとしたと思われても、仕方無いのかもしれない。

そもそも木蘭の存在と価値を認め決めるのは、木蘭自身ではない。木蘭を所有する者である。

かつては父である慶国王であり、今は目の前の夫たる真国王だ。

右を向けと言え右を向き、左に行けと言われれば左へ行き、王女として生まれた務めを果たすために嫁げと言われたから、今、ここにいます。

「慶国王慶備の子は公けには6人となっている」

真国王は淡々と告げた。

その言葉は木蘭の無理やり塞いだ傷をまた抉るものだった。

木蘭は傷が再び開き、痛み、血を流し始めるのをありありと感じた。

ああ、やっぱり私はものの数にすら、入っていなかった。

震える指を隠すように、ぎゅっと拳を握りしめる。

湧きあがる何かを抑えるために、目を閉じる。

生まれ育った王宮を後にしても何も感情は浮かんでこなかったけれど、脳裏に過った思いはあった。

本当に私は、この生まれ育った国に何も期待していなかった。

慶国が木蘭を捨てたのではない。

木蘭こそが慶国を捨てるのだと。

そう思うことは木蘭にとって救いだった。

期待すること、それは自分の思い通りになればいいという浅ましい願い。

今まで何度祈っただろう。  
今まで何度望んだだろう。

そして期待通りになったことなどあったであろうか。  
木蘭にとって期待とは必ず裏切られるものだ。

だから期待などしない。  
浅ましい願いに身を委ねたりなど、しない。

慶国で死ぬまで籠の鳥のように、与えられるままに死ぬまで過ごすのと、人質として他国へ嫁すのも同じだとどうして期待してしまっただろう。

そして真国王の言葉はもう一つの意味を持っていた。

深く息を吐くと、まっすぐに真国王の瞳を見て、木蘭は事実のみを告げる。

木蘭の持つ、唯一の事実。

「私の母は身分卑しい者でありました。故に公けにされなかったの  
でありましょう」

木蘭が真国に来たのは、真国で妃という名の人質になるためだ。

だが事実を告げることは、木蘭に人質としての、価値など無いと告  
げることであつた。

王の公けにされていない子を他国へ嫁がせることは、例として無い  
わけではない。

ただそれは国力に明らかに差がある場合であり、さらに国力が上の  
国が下の国へすることである。

大陸の半分を手中へ収める真国へそれをするということは、慶国か  
ら真国への宣戦布告と同意であつた。

木蘭は慶国王の7番目の子として真国へ来た時から、祖国も自らの  
未来をも失う運命であつたのである。



### 新しい妃 三

「そうか」

真国王は表情を消して小さく呟くと、木蘭から視線を逸らした。手酌で盃を満たし、今度は少しずつ含むように飲み始める。

「まあ、そんなことはどうでもいいがな」

全くどうでもいい問題ではない。

本来なら、謁見の場で切り殺されてもおかしくない。かなり良心的な対応をされたとしても、即刻国に送り帰されるだろう。

もしも帰されたとしても、慶国に木蘭の場所はすでにないであろうが。

真国王は面倒くさそうに首をひねり音を鳴らし、今度は顔を動かさず目線だけを木蘭に向け心底興味が無さそうに言った。

「俺はお前を妻と認めた。お前がどの何者であろうとそれが覆ることはない」

「……私は真国王陛下のお傍にいるのにふさわしい者ではございません」

自嘲的な笑みを浮かべながら呟いた木蘭に、  
真国王は飲みかけの自らの盃を差し出した。

差し出されたそれを受け取ると、飲め、というように顎をしゃくる。  
そのままひとくち飲み込むと強烈な酒の香りと共に喉が焼けるように熱くなった。

思わず顔をしかめた木蘭を見て真国王は面白そうに喉の奥で笑う。  
そして木蘭の手から盃を取り上げると残りを一息で飲み干す。

「次はもつと飲みやすいものを用意させよう、葡萄酒はどうだ」

「……次の機会は」

木蘭の言葉を遮るように、真国王は笑い、言った。

「お前は俺のものだと自分で言ったのを忘れたのか？」

「いえ、忘れてはおりません。真実その通りでございます」

「俺はお前に覚悟を問うた。お前は証を立てた。必要なことはそれで十分だ」

真国王は下ろされた艶やかに光る木蘭の黒髪を一房手に取ると、

初めて会った時にしたように、また恭しく口づけた。

「お前は俺の妻だ。いいな」

反論は許さない。

こちらを見つめてくる強い眼差しが、そう告げていた。

音を立てて盃が卓に置かれると、

静かに扉が開いて給仕の女官たちと琳々が部屋へ戻ってきた。

「また来る」

強い酒を何杯も飲んだというのに真国王はふらつきもせず長椅子から立ち上がると、

来た時と同じような突然さで部屋を出て行った。

慶木蘭が公けにされていない庶出の王女であるということを知

真国側では最初から把握していた。

それでも迎えの馬車を差し向けたのは、慶国側の反応を図るためであつた。

慶国は地の理のおかげで長く戦乱とは遠い場所にいられた国である。今まで一度も他国の侵略を受けたことが無い。

そのためこの大陸に数多ある国の中では、かなり長い歴史を持つ珍

しい国ではあった。

慶国は自らの持つ歴史こそ国として最も価値があると驕っていたため、西の大国である真国を歴史の浅い格下の国だと見下していたのである。

しかしその長い歴史に見合うだけの国力、すなわち他国への影響力や軍事力、財力を持っているわけではない。

故に真国からしてみれば、慶国は全く恐れるに足る国ではなかった。真国はいつでも確実に叩きつぶせる自信があるからこそ、嫁き遅れの庶出の王女との婚姻の申し込みという慶国のあからさまな挑発を受け入れたのである。

そうしてやってきた王女は、不思議な女であった。

公衆の面前で全裸になるという、王族であれば死に値する恥辱にも耐え、まっすぐな瞳で忠誠を誓う。

「この地、この宮殿へ足を踏み入れたときから、私は真国王様のものです」

今まで数え切れないほどの国の王女・王子が真国へやってきた。

真国王はその全てに試練を与えてきた。

西の戦狂いに仕える覚悟を問うために。

だが本物の強者たる真国王と対峙して、己を保つことが出来たもの

は皆無と言ってよかった。

見せつけられた力の片鱗を畏れ動けなくなるだけならまだまし。中には気を失ったり、失禁したりする者もいた。

試練を乗り越え真国王の前に立つことができた者。

それは今まで慶国王女慶木蘭以外に、存在しなかったのである。

だから真国王は迷いなく、自らに最も近い妃の座を与えた。  
慶木蘭が嫡出であろうが庶出であろうが、それは全く問題ではなかった。

試練を乗り越え、証を立てることが出来る者であることこそが真国王妃となることに必要な何にも代えがたい条件であると真国王は考えていたからである。

## 望まぬ者 一

真国の王宮で妃として暮らし始めた木蘭があまり祖国では厚遇されていなかったことを、仕えることになった者たちはすぐに察した。新たな妃は立ち振る舞いや言葉遣い・知識など、王族としてふさわしい教養を十分持ち合わせていた。

ただ、王族が成長する過程で空気のように身に纏うはずの人の上に立つ者の態度を備えていなかったからである。

王と木蘭が盃を交わした初めての夜から、10日が経過した頃、木蘭に仕える女官や侍女を束ねる頭が真国王へ謁見を求めた。理由を尋ねた官僚に女官頭は、涙ながらに木蘭の暮らしぶりを事細く語った。

「木蘭様はまるで生きながら眠っておられるかのようです」

湯殿で身体を洗われたり不浄の世話をされることを木蘭は拒絶こそしなかったがなるべく避け、以前から仕える琳々にさせるか、下手すると自分で何とかしてしまう。

若い女性ならばいくらあっても足りない新しい衣装にも化粧や美容にもさして関心を示さない。芝居や音楽もあまり好まない。

誰の手も借りずに息を潜めるような生活をおくろうとするその姿は、長く独り身を過ごしてきた王がやっと迎えた妃に仕えることを楽しみにしていた女官や侍女たちを大いに落胆させた。

主を持つ者にとって、その主から頼りとされないことは何よりも辛い。

「何にも興味をお示しになりません。食べ物、着るもの、見るもの全て

私たちがご用意させて頂いたものをそのままお受け取りになります。

何かご入用なものが無いかお尋ねしても、今あるもので足りているとお答えになります」

それどころか、と女官頭は続ける。

「自分のような者に過分なことはしなくてもよいとまで仰せになるのです。

他に大切な仕事があるだろう、そちらを優先させよと……」

この言葉は通常であれば仕える者への叱責である。

余計なことをするな、と釘を差す一言。

だが、言葉の裏の裏の意味まで察することのできる女官たちでも、新たな妃の言葉は本当に言葉通りの意味であると理解した。

女官や侍女を心から労わる態度や言葉と共に言われたからである。

妃に仕える女官たちにとって、妃の世話以上に大切な仕事などありはしないのに。

女官頭から説明されればされるほど、話を聞いた官僚たちは新しい妃が今までどれほど日陰の存在として自ら暗闇でうずくまるように暮らし生きてきたのかがありありと目に浮かぶようであった。

中には女官頭のように目に涙を浮かべるものさえいた。

しかし仕える者達の嘆きは、木蘭の全く与り知らぬものであった。

木蘭と琳々からすればただ慶国で暮らしていた以前と全く変わらぬ暮らしをしているだけであつたからだ。

それどころかたくさんの女官や侍女たちがあれやこれやと世話を焼いてくれ、こちらから求める前に全ての用意が整っている真国での暮らしは、以前と比べられないくらい良いものであつた。

食事は山海の珍味が食べきれない程多く卓に並ぶ。

毎日丁寧に身を磨いて手入れを施される。

1日に何度着替えてもまだ袖を通しきれない程の衣装が次々と運ばれる。

部屋まで楽師や舞い手がわざわざやってきてその腕を披露してくれる。

それでも女官たちはまだ何か足りないものは無いかと心を碎いてくれた。

しかし求めるまでも無くありとあらゆるものが満ち足りていて、足りないものを改めて問われても、無いとしか答えようがなかったのだ。

当初女官たちは古参の存在である琳々に泣きついた。

王の妃たる方が、こんな暮らしをしていいわけがない。

琳々は木蘭が王族、そして王の妃としてふさわしい扱いをされることに全く異論は無かったので、多数の女官や侍女に傳かれる今の生活こそが当たり前で今までが異常であつたと、何度も何度も訴えた。しかし木蘭の身に染みついた強烈な劣等感と我の抑制は琳々の熱心な説得をもつてしても消しざることが出来なかった。

望まれぬ存在として今までの人生を過ごしてきた木蘭にとって、他



者から与えられるもの以上を望むことは自らの分をわきまえない行動であつた。

それどころか望むことは罪惡にすら近かつたのである。

琳々は初めて木蘭にその考え方を根付かせた母を恨んだ。

しかしそうであつたからこそ何も持たない木蘭と琳々が慶国で心安らかに暮らすことが出来ていたのもまた事実であつた。

毎日繰り返される問いに「今あるもので十分、足りているわ」と木蘭は笑いながら首を横に振り続ける。

ただ何も望まぬことがどれほど不幸なことか。  
木蘭本人だけが、それに全く気づいていなかった。

## 望まぬ者 二

真国王はまた唐突に木蘭の前に現れた。

「土産だ」

その言葉と卓に並べられたのは色とりどり大きさもまちまちな酒瓶であつた。

「火酒はあまり好みではないようだったからな。女が好みそうなものを揃えたぞ」

真国王が軽く目線をくれると、女官たちはすぐさま酒肴を整えるために動き出した。

あつという間に卓の上には薄く切った麺麴の上に味付けされた野菜や乾酪をのせたものやら白身魚の切り身を酢と油で和えたもの、干した肉をあぶったものなど、あらかじめ用意されていたかのような手の込んだ肴がずらりと並べられる。

「…お酒を嗜まれるには、まだ日が高いかと存じますが」

前盃を交わした時は湯浴みと夕食を済ませた、大分夜も更けた頃である。

今は昼はとうに過ぎたが夕食には少々早い、まだ太陽は傾き始めたばかりの時刻。

「まあ固いことを言うな」

上座である椅子ではなく長椅子に座ると、自分の隣を軽く叩く。どうやらまた隣に座れ、ということらしい。

断れば返ってくる言葉も予想がついたので、木蘭は大人しく隣に座った。

真国王様はお酒が好きなのかしら。

真昼間から酒を飲んでもいいのは、祝い事や宴の時だけ、というのが木蘭の中の常識であつたからだ。固いことを言うな、ということは真国でも昼から酒を飲む習慣があるわけではないようである。

女官たちが玻璃の杯を運んでくる。

運ばれてきた杯の中はなんと橙色と濃紫とが2層になっている。

酒と言えば単純に果実を発酵させたものか米から作られた透明か白濁したものしか知らない木蘭には初めて見る酒であつた。

こうして混ぜて飲む、と真国王は女官の捧げ持った盆から杯を取り、添えられた棒で軽やかに混ぜる。

すると橙色と濃紫が混ざり合い、見たことも無い不思議な色に変わった。

飲みと促されて口を付けると、甘酸っぱい香りと味が口いっぱいに広がる。

喉を通りぬけても酒特有の焼けるような感じは少ない。只の果実酒では、こんな味はしないだろう。

「とっても美味しいです」

「黒酸塊の酒を甘橙の汁で割ったものだ。甘くて飲みなれない者に

も飲みやすい」

真国王の盃には相変わらず火酒が注がれていた。  
また一息で空けてしまう。

「お酒、好きなのですか？」

思ったことをそのまま言葉にしてしまった。

真国王は目線だけ木蘭に向けてくつくつと喉の奥で笑った。

「そうだな……我は好きだが」

盃が音を立てて卓に置かれると、女官たちは一礼すると部屋から静かに出て行った。

「酒が我を好きではないようだ」

いくら呑んでもちつとも酔えないからな。

そう呟くと真国王は味付けされた野菜ののった麵麴をばいと口に放り込む。

音を立てて咀嚼するともうひとつ、乾酪がのったもの手に取ると木蘭の口元へ差し出した。

手で受け取るうとすると、口を開けると言うように顎をしゃくられる。

手掴みで物を食べるなんて、なんと行儀の悪いことか。

それでもためらいがちに口を開けると、ゆっくりと麵麴が口の中へ入れられた。

ねっとりとした濃厚な塩味の乾酪は甘い酒によく合う。

「美味いか？」

口にものが入った状態では言葉を発することが出来ないので、麵麩を頬張ったまま木蘭はただ首を縦に振る。その顔を見て真国王はまた喉の奥で笑った。

「ひとくちには多かったな」

麵麩を黒酸塊の酒でやっと喉に流し込むと、慌てて木蘭は言った。

「いいえ、私の口が小さいのです」

その言葉に真国王はまた笑う。

「ではひとまわり小さく作り直させよう、お前のために」

「それには及びませぬ。今のままで、十分でございます。  
半分に割れば足りりますゆえ」

少々行儀が悪いけれど仕方がない。

木蘭は卓に杯を置いた後、真国王のように指で麵麩を取ると二つに千切ってわけ、ひとつを口に入れた。半分だとちょうど木蘭のひとくち分だ。

これで大丈夫です、というように麵麩を頬張ったままにこりと笑って見せる。

すると真国王は木蘭の手首をつかむと自分の方へ引き寄せ、指につままれた麵麩の片割れをひとくちに食べてしまった。そのままのついていた野菜の汁で汚れた指を拭うように舐められる。

あまりのことに呆然とされるがままになっていた木蘭に、言葉が降

ってきた。

「……そんなささいなことすら、望まぬか」

木蘭は女官頭が官僚を通じて真国王に直訴したことなど知らない。そもそも自分が何も望まないことが他者にどのように受け取られるかということに全く考えが及ばないのだ。

今だってわざわざ用意された料理を自分のためだけに作り直す必要など無いと思ったから、半分にすれば事足りると示しただけ。

真国王は幼子に諭して聞かせるように、ゆっくりと、話し始めた。

「お前は俺の妻となった。それはわかっているな？」

「もちろんでございます」

「俺の妻であるということは、国王の妻ということだ」

「存じ上げております」

「国王の妻には様々な義務がある。国を束ねる者は権利と供に義務を果たさねばならぬ」

「当然のことでございます」

木蘭には真国王が何を言わんとしているか全く理解できていなかった。

ただひとつひとつ告げられる言葉に生真面目に返事を返す。

「自らに仕える者に仕事を与えることもその義務に含まれる」

「心得ております」

「ならばなぜ何も望まない？」

なぜと問われて、木蘭は返事を返せなかった。  
理由はただひとつ、満ち足りているからだ。

「女官たちはお前に何度も尋ねたはずだ。何か望むものはないかと」

「必要なものは、全て揃っておりますが」

「必要なものではない。お前の欲しいものだ」

「……ございませぬ。今で十分、満ち足りております」

そう答えると、木蘭は微笑んだ。

何の感情も窺い知ることのできない、透明な笑顔であった。

### 望まぬ者 三

これが黛玉だったら。

真国王の脳裏にかつての妻の面影が過る。

黛玉とは同い年で、生まれた時から結ばれることが決まっていた。  
15歳の時に婚儀を行い、それから5年後の20歳で黛玉は死んだ。  
息子の命と引き換えに。

よく言えば天真爛漫、そのまま言えば我儘放題。

宰相の娘という恵まれた立場で甘やかされ育てられ、気位が高く、  
新しいものが好きだった。

顔を合わせればあれが欲しい、これが欲しいと絶えずおねだりばかり。

でも一途で聡明で高潔で……心底大切な存在であった。

真国王にとっても、真国にとっても          その他の者にとっても。

そもそも黛玉にはこんなことを尋ねたりなどしない。

生まれた時から真国王妃になることが決まっていたから、死ぬまで  
背負っていくであろう責任も権利も義務も全てを黛玉は知り尽くして  
いた。そして他人の望むままに振る舞うことが出来た。

故に誰からも認められた真国王妃であったのだ。

ところが目の前にいる姫はどうだろう。

庶子として生まれたことで、王族として生まれながら貶められ、短



くも美しいはずの娘時代を閉じ込められて過ごした。

そして命すら奪われかねないところへ嫁がされた。

何も求めず、望まず、今で十分と何度も繰り返し言い、何ひとつ持っていないのに、満ち足りていると、笑う。

ざわり、と心が波立つ。

木蘭から手を離すと真国王は手酌で盃を満たし、一気に飲みこんだ。ひじ掛けに頬杖をつきながら、呟くように、問う。

「ならば今、お前は幸福か」

迷い無く、木蘭は答える。

「はい、私は幸せでございます。

真国王様の妻と認めて頂き、これ以上の幸福はございません」

木蘭の顔には満面の笑みが浮かんでいた。

追従などではなく、木蘭にとってそれは心からの言葉であった。

今まで名ばかりの王族として、ただ王宮の隅で生きていただけの木蘭を認めたのは真国王だけだったから。

その言葉を聞いた真国王の胸を突いたのは憐憫であった。

木蘭は他国の王族が誰ひとり出来なかった試練を乗り越え覚悟を示した。

真国王の妃の地位は他の誰でもない、自らの力で得たものだということに、全く気付いていない。

卑しい自分に真国王から与えられたものと、心の底から感謝しているのだ。

真国王は卓に盃を置くと、空いた腕でそつと木蘭の肩を抱いた。木蘭は少し驚いた顔をしたが、目を伏せ、その腕に身を委ねた。

「……ならばもっと、幸せにしてやらねばならぬな」

それは妻に対する夫の義務だ。

二人は長い間、夕餉の支度が整ったと女官が伝えに来るまで、肩を寄せ合っていた。

## 掌中の玉

慶国の王族が真国王の妃として迎え入れられたことは公表するまでも無く、瞬く間に大陸諸国に知れ渡っていた。

大陸の半分を従える真国の動向を探っていない国など皆無に近い。婚姻の申し込みのために王族を乗せて王宮へ入る馬車の存在を、各国はこぞって監視していた。

真国王妃にどの国が入りこむのかは大陸中の国の最大の関心事であったからだ。

そして申し込みを拒否され、送り返されなかったのは、慶国から来た馬車だけであつたのである。

しかし迎え入れられた王女慶木蘭は公けにされていない庶出の子であり、慶国内でもほとんど知られていない存在であつたため、一体どんな人物かは謎に包まれていた。

その名前だけですら、情報としての価値があつたほどである。当初は性別すら、不明であつた。

唯一慶木蘭の存在をはっきりと目撃しているのは、同じ時に謁見した臨国と博国の一行だけだ。

しかし臨国と博国にしてみれば、慶国の王女のことを語るところとは自ら婚姻の申し込みを撥ねつけられたと暴露することであつたため、堅く口を閉ざしているしかなかった。

従つて各国はこぞつて慶国に探りを入れたが、元々特定の国としかほとんど交流が無い国であり、慶国にとつても慶木蘭は公けには存在しない王女である。

しかも公表しようにも、木蘭本人はすでに慶国を離れ、真国の下だ。

木蘭が真国王に「王族の証」が無い、と告げたように、慶国にも木蘭が王女であるという外国に示すことが出来る証が無かった。

公けにされていない庶出の子を他国へ嫁がせるということは、決して褒められた行動では無い。かなり無礼な行為である。

木蘭の存在を公表するということは、その行為をも公けにするということでもあった。

それゆえに慶国も臨国や博国と同じように口を噤むしかなかった。

木蘭の存在を公けにはしない。

王がやっと迎えた妃をすぐさま国内外に示さねばと準備を始めていた官僚たちは思いがけない王の指示に、耳を疑った。

これで王への婚礼の申し込みが減り単純に返答に費やしてきた手間が減ると担当者たちは大喜びだったからである。それほどまでに真国と縁を結びたい国は多かったのだ。

「木蘭<sup>あれ</sup>は無欲で……無垢過ぎる。今暫く時間が必要だ」

真国王の妃となることに必要な条件を満たすことだけで真の王妃とは言えない。

その身にある責任・権利・義務、全てを理解することが出来なければ、妃は務まらない。

前王妃の黛玉が生まれながらに妃となることが決まっていたのは妃に必要なものを幼少時より教育する必要があったからである。

今の木蘭にはまだその荷は重すぎると真国王は判断した。

前王妃が遺してくれた息子2人は立派に成長し、成人している。

急いで後継ぎが必要だというわけではない。

そして20年の長い間王妃の座は空であつたが国を治めていくことに大きな支障があつたわけではない。

周囲の者の気遣いや心配は承知していたが、真国王にとって婚儀を急ぐ理由は無かつたのだ。

固く固く閉じられた不遇の王女の心が綻ぶまで、真国王は待つつもりだつた。

曇り光を失つた玉を少しずつ磨いていくように。

ただこの判断を後に真国王は悔やむこととなる。

## 叶えられた願い

いつもの昼下がり、ぼんやりと庭園を眺めやる。  
乾いた風が頬を撫でてゆく。

風に乗って香ばしい香緋の香りが辺りへ広がっていった。

真国王から望むこともお前の義務だと教えられてから、木蘭が女官に最初にした”お願い”は香緋だった。

大陸の東では西側のように発酵させた茶や茶の葉以外から作られる茶を飲む習慣があまり無い。

真国の女官たちは大陸の東の端に位置する慶からやってきた木蘭のために、茶といえば飲み慣れているであろう無発酵の緑茶や白茶を入れてくれていた。

その時ふと思い出したのは馬車の旅で振る舞われた、香り高い飲み物。

外で香緋を飲みたい。

その言葉に、女官たちは一瞬動きを止めた。

しかし次の瞬間弾かれたような笑顔を浮かべて応えた。

「今すぐにご用意致します!!」

その笑顔を見て、初めて木蘭は気付いた。

自分が望むことは、罪悪などでは無いと。

今傍にいてくれる者達にとって、自分の望みを叶えることこそが、望みなのだと。

女官たちは感嘆に値する速さで全ての準備を整えた。

庭園に卓と椅子を出し、日差しを避ける大きな傘を立てる。

卓の上には真っ白な布がかけられ、干し果物を入れたものや、乾酪を使った焼き菓子がたっぷりと並べられている。好みに応じて入れられるという牛乳や、砂糖、楓の樹液、蜂蜜も用意されていた。

「以前はどちらでお召し上がりになられたのですか？」

注ぎ口の細い茶壺から香緋の焦茶色の元へお湯が注がれる。

茶漉しの中でぷくり、とお湯含み膨らんだそれは香ばしい、独特の香りを放つ。

香緋は冬霜が降りる地域では栽培することが出来ない。

大陸の東は冬の寒さが厳しいため香緋を作ることにはかなり難しいはずだ。

そのために飲む習慣がほとんどないのである。

「こちらへ来る途中、警護をしてくださった方が度々入れてくださったの」

「あら、それなら篤翼ではありませんか？」

篤翼の名前を聞いて、木蘭と琳々は顔を合わせる。

「ええ、お名前はそうでしたけど……」

戸惑いながら琳々が答えると女官がくすくす小さく笑いながら教えてくれた。

「篤翼はここ西殿の近衛兵団の小隊長を務めている者なのですけれど、

大の香緋好きでとっても有名なのですよ。

どこへ行くにも香緋の粉と道具を持っていくくらい。

だから警備をしている者で香緋といったら、篤翼と決まったようなものなんです」

確かに木蘭と琳々にとっても篤翼と言えばもう香緋である。

「違う香緋の粉を色々混ぜ合わせたりして、独自の味を作ったりもしてるんです。

頂くお給金のほとんどは香緋に消えてしまつらしいですわ」

「それは本当に好きなのね……」

木蘭にはそこまで夢中になることが無い。

そもそも趣味というものを今まで持ったことが無いのだ。強いて言えば読書や刺繍だろうか。

しかし好きでやっていたというよりは他にすることが無かったから、字を追いか知識を詰め込み針を動かしていただけだ。

何を望んでいいかわからないと言った木蘭に、真国王は教えてくれた。

何かを好きになるといい。

そうすれば自然と欲しいもの、望みは出てくるはずだ、と。

まず真国<sup>このくに</sup>を好きになろう。

香緋の香りと、女官たちの笑い声に包まれながら、木蘭は思った。



## 叶えられた願い（後書き）

琳々と篤翼の再会はこの話の後のことです。

## 持たざる者 一

目の前にずらりと並べられたのは、本朱子、光絹、天鷲絨、唐縮緬。艶やかに光る生地が山と積み上げられていた。

木蘭は命じられるままに生地を合わせ、羽織る。

少し離れたところから真国王が木蘭を眺め、腕組みしながら合わせた生地を吟味していた。

「ああ、濃い色よりも、淡い色の方が似合うな」

その一言で濃い色の生地は下げられ、淡い色の生地がすかさず木蘭に合わせられる。

「淡くとも鮮やかなものがいい。その方が肌の色に合う」

「それでは刺繍も黄金ではなく、白銀の方がよろしいでしょうか」

「そうだな」

女官頭が応えると、衣装を担当している女官やお針子の侍女が真国王の言葉を真剣な面持ちで書きつけている。

生地が決まったかと思えば、今度は刺繍用の絹糸が持ちだされてきた。

白銀というだけでも数種類ある。

木蘭がその種類の多さに戸惑いの表情を浮かべたのに気付いたのか、真国王がいつもの口元を歪めた笑みを浮かべながら近づいてきた。

「すまぬ、そなたの好みを聞いていなかったな。何色がよい？」

好みなど無い、などとはとてもとも言える雰囲気では無かった。

真国のことを好きになろうと決めたはいいものの、

そもそも木蘭は真国のことを全く知らないことに気付いた。

どのような歴史があり、どのくらいの人が住み、どういった産業が盛んなのか。

そして国としての成り立ちや特色等、気づいてみれば知りたいことは山のようにあった。

木蘭の世話をしてくれる女官たちは、慶国と真国の風習の違いをよく理解していて、なるべく木蘭が過ごしやすいようにと食事や飲み物、衣装など、慣れ親しんだ慶国のものになり近いものを揃えてくれている。

しかし口にするものや袖を通すものが同じということは、確かに安心できたが、それでは慶国にいた時と何も変わらない。  
何も知ることが出来ない。

そこでまた、木蘭は”お願い”してみることにした。

まずは…着るものから。

「新しい衣が欲しいの。今まで着ていたものでは無くて、真国の意匠のものが着たいわ」

その一言で、次の日には山ほどの生地見本が西殿へ届けられた。

衣装を担当する女官や侍女たちは生地の種類から近頃流行の柄や色、身分によって違う意匠や用途によって変わる縫取りの形などをこと細かく説明してくれたが、山と積まれた生地を目の前にして、木蘭

はすっかり混乱してしまった。

何しろ今まで木蘭は自分で衣装を選んだことが無かったのである。

慶国にいた時は琳々や乳母であった琳々の母が生地の調達から仕立てまで全て整えてくれていたし、日々の生活に必要な分しか持つていなかったから、選ぶ余地というものが元々無かったのだ。

琳々もなんとか助け舟を出したかったが、何しろ今まで木蘭の衣装を手がけてきたといっても身体に合ったものを作っていただけで、衣装の美的判断力にはいささか自信がない。

生地の前で途方に暮れた様子の木蘭を見て、西殿女官歴30年余りの女官頭は笑顔で厳かに言った。

「頼りになる方がいらつしますよ」

まさかその頼りになる方が、真国王だとして予想がつくだろうか。

真国王が木蘭の衣装を選んでいる様子を見て、女官頭を始めとする年嵩の女官や侍女たちは20年前を思い出さずにはいられなかった。前王妃黛玉が息災であった頃はこんな光景が、ごく当たり前のことであつたからだ。

真国王は何かにつけ新しい衣装や装飾を欲しがる黛玉とよく一緒に生地や意匠を選んでいた。

当初は無理やり黛玉に付き合わされていた格好であつたが、文句をいいながらも真国王も選ぶことを楽しんでいた。

逆に黛玉が真国王の身につけるものを見立てたりなどもしていた。

黛玉を産褥で亡くしてから真国王は公式行事や祭祀など特別なこと

が無い限り、黒しか身に付けない。

衣を生地から選んで身につけるなんてことは、しなくなった。

今日も飾り気の無い黒い衣を纏っている。

だから西殿に仕える者達は現真国王が亡くなるまで、新しい主を迎えることはないかもしれないと覚悟していた。

だが今日の前には王が認めた新しい妃がいる。

女官頭は王に一言も「木蘭様のために衣装を選んでくださいませ」などとは陳情していない。

ただ侍従を通して、「木蘭様が新しい衣装を欲しがっております」と報告しただけだ。

それだけで王は驚異的な強引さで木蘭のために時間を設け、衣装を選んでいる。

とても楽しそうに。

今まで待った甲斐があった。

黛玉様の墓前に報告せねばならない。

国王陛下はやっと、隣に立つ方をお迎えなさいましたと。

女官頭は思わずこみあげてくる涙をぐっとこらえ、笑顔で王の言葉に応えていた。

こんな王の姿を見るのは、本当に久しぶりであったから。

自分の涙で水を注すようなことになれば、台無しだ。

しかし散々選び散らかしてやっと生地の色と刺繍の色が決まったところだ、

木蘭の様子がおかしいことに気がついた。心なしか表情が沈んでいる。

それに気付いたのは真国王も同じであつたらしい。

「やれやれ、慣れぬことをすると疲れるな」

呟くと大きく首を回し、音を鳴らす。

「今日はこれで仕舞いにするとしよう」

長椅子に音を立てて座ると、真国王はまた自らの隣を軽く叩いた。もうその仕草の意図は理解していたから、素直に木蘭は隣に腰掛ける。

女官たちは速やかに生地のを片づけると、茶の準備を整え静かに部屋から出て行った。

さっきまで賑やかだった部屋は一転、穏やかな静寂に包まれる。茶器に注がれた香緋の芳しい香りが広がっていく。

「今日は、お酒ではないのですか？」

「前に昼酒を咎められたからな」

くつくつと喉の奥で笑いながら、木蘭の黒髪を一房手に取ると撫ぜ遊ぶ。

「いつも酔ってばかりと思われてはたまらぬ」

黒髪を遊ぶ手はそのままに、真国王は茶器を取り香緋を飲み始めた。木蘭は何故だか両膝の上でぎゅっと掌を握り締め、俯きじっとそれを見つめている。

「疲れたか」

「いえ、そんなことはございません」

「俺の選んだ生地は気に入らぬか」

「滅相もございません」

つん、と髪を軽く引つ張られ、俯いていた顔を上げると、真国王と目が合う。

「ならばどうした」

何もかもを見透かすような眼差しで見つめられて、木蘭はどうしようもなく、呟いた。

「……私は衣の生地ひとつ選ぶことが出来ません」

自分の望みを叶えようと女官や侍女たちがたくさん生地を用意して、色々説明してくれて、ただその中から選べいいだけだというのに。

何も決められない。

そのことが堪らなく、苦しかった。

## 持たざる者 二

なぜ、笑うのだろう。

合わせた視線の先、木蘭の瞳は今にも何かが零れおちそうなほど揺れているのに、潤すものは溢れてこない。それどころか口角をあげ、笑みを作ろうとする。

「私は、今まで、全てを、人に預けて、きて、しまいました」

だから選び方ひとつもわからない。  
嗚咽をこらえるように、小さく言葉を紡ぐ。

だから、何一つ、出来ないのです。

そう呟き目を細めた、木蘭の顔は確かに笑っている。  
しかしその姿は慟哭であった。例え瞳に涙が無くとも、声を上げていなくても。

ざわり、とまた、真国王の心が波立つ。

なぜ、自分のせいにする。

自分の全てを自分以外の者に支配され続けて。何もかもが自分の与り知らぬ場所で回っているのに。  
選べないことも出来ないことも何一つとして、木蘭の罪ではないのに。

「木蘭様はまるで生きながら眠っておられるかのようです」



官僚を通して伝えられた女官頭の言葉が脳裏に過る。

その言葉の意味を今、真国王は心から理解した。

鳥や風の気まぐれによって運ばれ、ひっそりとそこで芽を出して。手折られても、踏みつけられても、嵐にあっても、声を上げること、逃げる術を持たない、それはまるで名も無き草花の姿。

その花を、蹂躪しているのは、俺か。

得体の知れない何かに突き動かされるように、真国王は木蘭へ手を伸ばした。

そのまま、木蘭を腕の中に納めてしまう。

放り投げた茶器が、鈍い小さな音を立てて、足元に転がる。香緋が飛び散り、絨毯に染みが広がっていく。

「陛下、あの、香緋が……」

「捨て置け」

最初は確かに忘れられぬ屈辱を味わわせるつもりではあった。

西の戦狂いの力を欲するならばくれてやる。その代わりその力に見合う器を掲げる。覚悟を示せ。

試練のひとつやふたつ、乗り越えて見せろ、と。見せしめの、つもりだった。

事実、今まで力を欲するくせに、同じだけを返せる者などいなかった。

しかしその試練を乗り越えた唯一の存在は何も持たず何も望まぬ。真っすぐな瞳で私はあなたのものだと言う。それが当然のこのよ

うに。

真国王は、抱きしめる腕に力を込める。

今まで自分の力を欲するものは掃いて捨てるほどいた。

しかし何かを与えることが、望みを言わせることが、重荷ならば、  
一体何が出来るだろう。

傷つきたいわけじゃない。

いや、もう些細な傷すら許せない。

腕の中の花は、されるがまま。

真国王の腕は強く強く、木蘭を捕えて離さない。

誰かに抱きしめられるなんて、琳々や琳々の母以外にされたことなどない。

身体全てを腕の中に収められて、木蘭は一瞬呼吸を忘れた。

柔らかな女のそれとは違う、硬く強靱な身体が衣の上からでもわかる。

これが、男のひと。

ひとつ、深呼吸すると絨毯に転がる茶器から零れた香緋からではなく、頬に触れる衣からふわりと甘く粉っぽい香りが鼻をくすぐった。  
この香りの名は何といっただろう。

そんなとりとめもないことを考えていたら、真国王の吐息が耳にかかる。

「木蘭」

名をよぶ声はいつもよりも低くかすれている。

言葉は吐息と共に耳をくすぐり、木蘭はわずかに身じろぎした。

ただ名前をよばただけなのに、胸の奥がざわつく。

「はい、陛下」

囁かれた名前に込められた温度に気付くことなく抱かれた腕の中で、木蘭は答える。

しかし頭とは別に身体は感じていた。

短い呼びかけにたつぷりと含まれた強い雄の熱を。

「こうされることは、嫌ではないか」

言葉と共に、木蘭を抱く腕にまた力が込められる。

こつ、とは今のように抱きしめられることであるうか。

妻が夫の腕を拒むことなどあり得ないから、木蘭の答えはひとつだ。

「はい、嫌ではございません」

その答えに促されるように、背に回されていた腕の力が少しだけ緩められ、木蘭をその中に閉じ込めるだけではなく別の意味を持って動き始めた。

右手は身体の形を確かめるように背中をなぞり腰を引き寄せ、左手は背中を辿り、うなじを撫で上げ、髪を弄ぶ。

「……嫌ではないか」

掠れた声がまた耳元で囁かれる。

嫌ではない。しかし、何かが違う。

今まで経験したことの無い、胸の奥のざわめきがより一層、大きくなる。

「嫌ではございません。ただ……」

「ただ？」

「……少しだけ、腕が苦しゅうございます」

胸の奥から湧き上がるざわめきをどう表現していいかわからなくて木蘭は腕に込められた力のせいにする。

「そうか」

木蘭の答えが正しかったのか間違っていたのかはわからないが、真国王はくつくつと喉の奥で笑うと、腕の力を抜き、抱き締めるのではなく包み込むように木蘭の背で手を組んだ。

「もう苦しくないか」

「はい」

苦しくはない。

でも、身体にかけられていた力が無くなった時、なぜだか寂しい、と木蘭は思った。

腕の力が無くなっても、ざわめきは止まない。

どうしていいかわからなくて顔を上げると、真国王がじっと自分を見ていたことに、ようやく気づいた。

いつもと違う眼差しに、また、呼吸が止まる。

「ならば、俺がこうして抱きしめたときは」

問いかけて、やっと呼吸を取り戻す。

「はい」

「……お前からも抱いてくれ」

「……はい、陛下」

木蘭は答えると、横を向いて真国王から視線を外し、ずっと硬く握り締めていた手を開いて真国王の背中に回し、そっと自分の身体を寄り添わせた。

衣から立ち昇る甘く粉っぽい香りに、酔ってしまいそうだとぼんやり思った。

## 芽生えた望み 一

生きていくということは、毎日何かを選ぶということである。

小さな選択は行動を促し、行動の積み重ねが習慣を作り、習慣はいつしか人格を形作る。

木蘭の人格はまさに「何も選ばない」という行動によって形作られていた。

望まず、願わず、努めない。

同じような暮らしをしていたというのに、琳々がそうならなかったのは、琳々には木蘭に仕えるという明確な目的があったからに他ならない。

無欲であるということは、木蘭を守る唯一の鎧であった。

欲しがらないから、手に入らなくても絶望しなくて済む。

偏った諦観は慶国の王宮の隅で名ばかりの王族として暮らしていくために身につけた悲しい習慣である。

木蘭には何も無い。

生きていく活力にすべき目的も無い。

だから他者が己れを支配する運命を拒む理由も無い。

生まれてきた時から選ぶ権利を与えられていないから。

だが自分の新しい所有者となった真国王は、木蘭が選ぶことを望んだ。

しかし木蘭は望まれたことに応えられなかった。

ただ好きな生地を選ぶという、ほんの些細なことですら、出来ない。

夫の言葉通りに出来ないなんて、妻として失格だ。  
それなのに、真国王は木蘭を責めたりはしなかった。  
優しく、強く、抱きしめて、赦した。

「木蘭」

抱きしめられた強い力を思い出すたび、低くかすれた声が聞こえる  
気がした。  
耳から離れてくれない声は、穏やかに水を湛えていた木蘭の心を波  
立たせる。

なぜ私は何もできないのだろう。  
何も持っていないのだろう。

求められたのなら、返したい。  
抱きしめてくれた、夫の願いに応えたい。

夫を好きになりたい。

それは木蘭にとって、長く封印されていた”欲”であった。

そして初めての、恋であった。

「また来る」

振り返りもせず去っていく真国王に木蘭は深く頭を下げる。

「近頃よくいらっやいますね」

真国王を見送った木蘭に琳々が盃や酒肴を片付けながら嬉しそうに言う。

初めて抱きしめられたあの日から、一月。<sup>ひつぎ</sup>真国王は頻繁に木蘭の元へ訪れるようになった。

執務の合間を縫ってきているらしく時間は昼であつたり夜であつたりとかなりまちまちであつたが、真国王はいつもふらりと木蘭の居室を訪れ、一緒に酒や茶を何杯か飲み他愛もない話を少し交わして去っていく。

「そうね」

今日もいつものように先触れの訪れから間もなく現れ、火酒を飲んで帰って行った。

二人きりで過ごす、ほんの一時。

「……何か、ございましたか？」

いつも通りの笑顔で応えたつもりであつたのに目が合った琳々は片付ける手を止め、訝しげに眉を顰めていた。慌てて否定する。

「心配するようなことは何もないわ。陛下はお優しい方ですもの」

傷つけられたり、酷いことをされているわけではない。

むしろ優しく名を呼び、酒や甘味を勧め、語りかけ、時には頭を撫でてくれる。

「何も、ないわ……」

真国王は木蘭とただ共に過ごすだけで、決して何かを強引に与えた



り求めたりはしなかった。

それは何も持たない木蘭が苦しまぬようにしてくれているのだらうと、頭ではすぐに理解できた。真国王は限りなく甘く、優しく木蘭に接してくれていたから。

その優しさが辛いなどと、口に出せるわけがなかった。

何も無いことが苦しい日が来ることなど、考えたこともなかった。

夫のために何かをしたい、求められたら返したいという願いは木蘭にとって生まれて初めて自覚した人生における目的となった。その思いは日に日に強くなるばかり。

しかしその願いと同時に、心を侵食し始めたのは自分勝手な望みであつた。

あの時のように、抱き締めてほしい。

あの甘く粉っぽい香りと、強い腕がもう一度、ほしい。

与えられることばかりを望む、身勝手な思い。

口に出せば、叶えられるかもしれない。望むことを教えてくれたのは真国王本人だ。

きつと、抱き締めてくれるはず。

でも、もし拒絶されたら？

脳裏に思い浮かべるだけで絶望に目が眩む。

長い間”欲”を心の奥底に封じこめ続けていた木蘭にとって、何かを願い望むことは罪惡に近い。いざ願いを口に出してそれが叶えられようとしても、そのために何かを選択することすらできないと思ひ知らされている木蘭は以前にも増して臆病になっていた。

望んで与えられたものですら目の前に置かれたとしてもその手をのばしていいかわからないから。

そして望んだものが与えられたとしても、その見返りに何も返すことが出来ない自分は、何かを求める権利など無いと思っていた。

自分は無条件で与えられる存在などではないから。

陛下は卑しい身分の自分を認めて優しく接して下さる。

それだけで充分、足りているはずと木蘭は繰り返し自分に言い聞かせた。

しかし芽生えた相反する二つの望みは木蘭は苦しめていた。

どちらも嘘偽りの無い、心からの、望みであつたから。

## 芽生えた望み 二

熱した鏝<sup>こて</sup>で髪を巻き、真っ直ぐな髪は緩やかにうねる巻き毛に。目の縁をぐるりと囲むように太く墨を引き、瞼には油脂と青い顔料を混ぜたもので陰影をつけ、耳から頬にかけて橙色の頬紅をたつぷりと施す。身につける衣は鮮やかな朱色。腰裾は朱華色の透けるように織られた綿で、帯は黄金。衿は広めにとって開いた胸元を天藍石の首飾りで彩る。

「……どうかしら？」

覗き込んだ鏡の中にいたのは今まで見たこともない姿の木蘭であった。

真国の女性に今一番人気であるという衣装と化粧の組み合わせを試みたのである。

問いかけられた女官たちは正直に言うと言をひねらざるを得なかった。真国の民の容貌で一番多いのは小麦色の巻髪に褐色の肌をした者達である。すなわち真国の女性に一番人気の組み合わせとは、この小麦色の巻髪と褐色の肌を持つ者に一番似合うとされている組み合わせであった。

木蘭の容姿の大きな特徴であり魅力は真っ直ぐで艶のある黒髪となめらかな象牙色の肌である。

まさに真国の民とは正反対。  
施された化粧と衣装は木蘭の魅力をひとつも引き立てず、ちぐはぐでなんとも可笑しなものにしてしまっていた。

「こういった装いも、時にはよろしいかと存じます」

小榮という中堅の女官がしれつと答える。

最近流行の装いを希望した木蘭のために今傍にいるのは経験の浅い年齢が若い者たちばかりで、戸惑う主の問いにどう答えていいか一瞬詰まってしまうていたのである。琳々はというと、木蘭と同じでこの装いが正しいのか、美しいのか、似合っているのかがいまいちよくわかっていなかったため答えようがなかった。

鏡の前で身をひねったり首を傾げたり、落ち着かない風情であった木蘭だが、やがてじつと鏡を見つめて呟いた。

「……王妃様のように、見えるかしら」

その場にいた女官たちの中に真国王妃薫玉の姿を見たことがあるものはいなかった。

しかし絶対に薫玉には見えないと彼女たちはわかっていたが、それを言葉にする者はさすがにいない。

何かを選択して決めるということが出来ない木蘭が思いついたのは、誰かを手本とすること。

その手本として一番ふさわしいと思える存在は、今は亡き真国王妃薫玉をおいて他にない。薫玉は流行に鋭く常に最新の意匠を纏い、毎日丁寧化粧を施し、宝玉で飾り、まさに輝くばかりの美しさであつたと伝えられる。

ならば自分も同じように着飾ろう。

以前衣装の生地をあんなに楽しそうに選んでくださった。ならば飾った姿がお好きだと思っから。

真国王が愛した女性と同じになれば、自分も受け入れてもらえるかもしれない。

木蘭は真剣だった。

ほんの少しでも真国王に近づきたくて。  
ほんの少しでも真国王に喜んでほしくて。

しかし真国王は思わず自らの目を疑った。

公務が忙しく10日ぶりに顔を合わせた木蘭の姿は、以前とは似ても似つかないものになっていたからである。

「……なんだその格好<sup>なり</sup>は」

「可笑いでしょうか？」

木蘭は首をかしげて問いかける。

可笑しいどころの話ではない。わざと何かの仮装をしているかのような、姿だ。

先触れの女官がこちらに寄こした戸惑うような視線の意味はこれかと合点がいく。

「今この国で一番人気があるという衣装を揃えてみたのです」

大きくうねるように巻いた髪、橙色の頬紅、朱や黄などの鮮やかな原色を多用した衣装。確かに真国の若い女たちは皆これと似たような格好をしている。

しかししなやかで真っ直ぐだった黒髪はごわごわとした巻き髪になっており、なめらかな象牙色の肌からは塗り込められた油性の練り粉と頬紅に瑞々しさを奪われていた。似合うと言ってからいつも身に着けていた淡い色の衣装ではなくけばけらしい派手な色のもの。

「……変でしょうか」

一瞬吊り上がった真国王の眉に木蘭は身を竦めた。

また自分は何か失敗してしまったのか。王の前だというのに思わず鏡のある方へ足を向けようとしてしまったその瞬間、ものすごい力で腰を掴まれ、そのまま持ちあげられる。

「ひゃあ!？」

一瞬感じた浮遊感に奇声が喉から滑り落ちた。持ちあげられると同時に背中と膝下を支えられ、木蘭は真国王に横向きに抱きあげられていた。

「陛下!？」

控えていた女官たちが驚き声を上げる。

そんな姿を気にも留めず真国王は無言で木蘭を抱いて扉を勢いよく開けた。そのまま迷いなくどこかへ向かって行く。

「へ、陛下、どちらへ?!」

慌てて女官たちが追いかけてくるが、女たちの小走りの速さよりも大股で歩く真国王の方が速い。

「湯の準備をさせろ! 急げ!」

急げという言葉に女官たちは衣の裾をたくし上げ全力で走り出した。王の命令は、絶対だからだ。

「陛下……」

木蘭はおずおずと呼びかけた。

「私はまた何か失敗をしてしまったのですね……」

今度は何を間違えてしまったのだろう。間違えないようにと、王妃薫玉を真似たことそのものが、間違いであつたのだろうか。

真国王からの答えは無い。真っ直ぐに前を向いて、ずんずん歩いていく。

しかし思いがけず与えられた真国王の腕に、木蘭の心は舞い上がつていた。

硬く、暖かく、あの甘く粉っぽい香りがする。

初めて抱きしめられたあの時のように、胸の奥からざわめきが湧き出す。

けれどそんな気持ちは今の自分には許されないような気がして、木蘭は目を伏せた。

本当に自分は何もできない。

どうしようもなく惨めで苦しい感情が、胸の奥から湧き出したざわめきと共に木蘭を混乱させた。

### 芽生えた望み 三

真国王が木蘭を抱いて湯殿に到着した時には浴槽にはなみなみと湯が満たされ湯浴みの準備は整っており、湯殿で木蘭の世話をする女たちと準備を急がせた女官たちが平伏しながら二人を出迎えた。

「それでは木蘭様をお預かり致します」

顔を合わせるなり湯殿の準備を命じた真国王の意図は木蘭の化粧を落とさせることだろうと女官たちは推測していた。

……それほどまでに、似合っていなかったのである。

「いらん。しばらく近寄るな」

しかし真国王は木蘭を腕から解放することなく女官たちに鋭く言い放つと足で扉を蹴破りそのままの勢いで脱衣場を通り抜け、歩いてゆく。

驚かされたのは脱衣場や洗い場で控えていた湯殿の女たちである。王とその妃と一緒に湯を使うことはまあ、仲がよければありえることだ。そのくらいであつたら彼女たちは顔色一つ変えずに仕事を遂行することができた。

しかし今扉を蹴破つてやってきた王と妃にそんな甘い雰囲気は微塵も感じられない。さらに衣を纏ったまま真っすぐに石で作られた浴槽へと向かっているのだ。

「あの、陛下……？」

「目をつぶって、息を止める」



周囲のうろたえぶりに思わず木蘭は再び問いかけた。  
返ってきた言葉は問いかけへの答えではなかったが、木蘭は言葉通りに目をきつく閉じ、息を止めた。

次の瞬間、木蘭は浴槽に沈んでいた。  
洗い場の女たちの鋭い悲鳴が湯殿に響き渡る。

真国王は木蘭を抱きかかえたまま、浴槽に飛び込んだのである。  
適温にされた湯の中で真国王は木蘭の丁寧に巻かれた髪を乱雑にかき回すと、すぐさま木蘭の身体を湯の中から引き上げ、浴槽の縁に腰かけ、その膝の上に乗せた。

「もう息はしてもよいぞ。だが目は閉じたままにいる」

「は、はいっ」

真国王は湯に濡れた自らの衣の袖で木蘭の顔にたっぷりと塗られた化粧を拭っていく。

しかし油性の練り粉は湯だけではなかなか落ちない。何度も何度も拭ってやっと全ての化粧が取り去ると今度は髪につけられた飾り紐や鬘を固定している針を丁寧に外し、手櫛で伸ばし始めた。

少しずつ浴槽から湯をすくい、髪に含ませながら、ゆっくりと。熱で癖をつけた髪は水につければすぐに元の直毛に戻る。

真国王の行動に騒然としていた湯殿の女たちであったが、王の行動を見て目の粗い洗髪用の櫛と髪につける香油をそつと差しだしたり、顔の手入れに使う道具を揃えたりとやっと本来の仕事をするべく動き出した。

湯殿の女たちは王や妃の側近くに仕える女官や侍女、侍従たちと比べて身分が非常に低いため基本的に王と直接話す権利を与えられていない。

故に身分が低い者がする仕事を王が妃に自ら行うという事態を彼女たちは見守るしかなかった。

丁寧にも木蘭の髪を梳りながら、真国王はため息をつくように呟いた。

「好きな衣装を選ぶとは言ったが、せめて自分に似合うものを身につける」

「……似合っておりませんでしたか」

「全くな」

木蘭とて女官たちの反応で薄々気づいてはいた。

だが薫玉を真似ようとしても、生まれた時から王の隣に立つことを定められた者を人から忘れられた存在として育った木蘭が真似ることとは一朝一夕で出来るものではない。それでもせめて見た目だけでも、真国に馴染むように。

この国の王の妃として、相応しいように。

かつて真国王が愛した人と同じ姿になるように。

しかしささやかな願いの発露は、顔をあわせた途端に湯殿に放り込まれる程度の出来。

以前も同じように外見を変えようとして衣装を選べず真国王の手を煩わせている。

同じ失敗を何度繰り返せばよいのだろう。

後悔と羞恥に、木蘭は己の濡れた衣装を掴み、身を硬くした。何かに脅えるように。

「目を開ける」

木蘭が硬く閉じられていた瞼をおずおずと開けると、予想していたよりもずつと近くに真国王の顔があった。

困ったように微笑むその顔がなぜか眩しくて、まつげについた雫を払うように木蘭はぱちぱちと目を瞬かせた。真国王は木蘭の顔に貼り付いた髪を指で退けると、そのまま濡れた髪をひと房手に取り、恭しく口付けた。

「……お前の真っ直ぐな髪は美しい。自分の持つ物を損なうような装いはするな」

「……はい」

「ではゆっくり温まってから、部屋に戻れ」

真国王は木蘭を横抱きにして一度浴槽の中に入ると、ゆっくりと木蘭の身体を浴槽に下ろした。

その腕から離される時、木蘭は思わず腕の主の衣を握りしめていた。木蘭の瞳に揺れる不安の色に気付いたのか真国王は苦笑すると身を屈め木蘭と視線を合わせて「怒ってないぞ」と呟いて、衣を握りしめていた指を解いた。

「次会う時はそのままの姿でおれ」

まるで幼子を諭すように優しく言うと、真国王は勢いよく浴槽から立ち上がり、そのまま脱衣場へ歩いていく。

湯殿の女たちが慌てて王の後ろをついていく姿を、木蘭は茫然と見送った。

濡れた衣のまま湯殿を出ようとした真国王を出迎えたのは、湯殿への立ち入りを禁じられた木蘭付きの女官たちともう一人、宰相の郭げんえい玄永であつた。

「お戯れは済みましたか、陛下」

女官たちが慌てて真国王を引きとめ、着替えを施す様を眺めながら、郭玄永は呆れたように呟いた。

「まあな。たまには西殿の風呂もいいもんだ」

「そうですか。ではもっと頻繁にこちらに通つて頂きましょう」

宰相の言葉に、女官たちは一斉に今の言葉の真意を探るべく会話に意識を向けた。

王と新しい妃の仲を一番気にしているのは、仕えている女官たちである。何しろ王は頻繁に木蘭の元へ訪れはするが、それだけなのだ。

「たまには、と言つただろう」

差し出された新しい衣に袖を通しながら、うんざりしたように真国王は応えた。しかし郭玄永は怯まない。彼と真国王はほぼ生まれた時からの付き合ひである。

ごまかしは通じない。

「もっと仲良くなさつて下さい」

「…………お前までそんなことを言うのか」

「私には言う権利がございます」

郭玄永は鋭く言い放った。

「20年も前に死んだ愚妹のことなど、さっさと忘れて頂きたい」

## 問い

幸せだと信じていた頃の記憶を忘却の彼方に押しやる事が出来るのであれば、  
もっと違う道があつたのだろう。

忘れ、消し去り、違う記憶で上書きすれば。  
最も簡単で、最も困難な方法。

だからどんなに願っても脳裏に刻み込まれた声はそれを許さない。

「亮、許してほしいなどとは言わない。……私はそれだけのことを  
したのだもの」

もう自分を名のみで呼ぶ者はいない。  
そしてこれからも現われない。

どうして。

繰り返される問いに答えをくれる者はいない。  
なぜならそれを知る者は失われてしまったから。

だが問い続けずにはいられない。

どうして。

時は戻らず、ただ流れ去っていくのみ。

## 雨音 一

季節はゆるやかに移り変わり、真国に雨季がやってきた。

夏の前に二ヶ月程雨が降り続くのである。

何時もは茶色く乾いた大地もこの時ばかりは潤い、草木が萌え、緑に染まる。

大陸の東側よりも冬が穏やかな西側は雪という形で天から水を与えられる機会が少ない。

故にこの二ヶ月は国の命をつなぐ重要な時期であった。

木蘭はしのつく雨の中、庭園に立てた大きな傘の下で茶を楽しんでいた。

傘を打つ雨粒の音はまるで鼓を打っているようだ。

雨が大して珍しいものではない慶国では、雨の日にわざわざ外に出たりはしない。

だが真国では大切な恵みの雨であったから、その貴重な時期を楽しむために、わざと外に茶や酒の席を設ける。

慶国にも四季があり、その季節にあった過ごし方があった。

しかし木蘭は知識として何をするかを知っていても、それを実際にしたことは一度も無い。

季節を感じさせてくれるものは天気や離宮の周囲にある僅かな草花から感じるものが全てであったからである。

真国での暮らしは木蘭に様々なことを教えてくれた。

晴れた日の美しさ、曇りの日の過ごし方、雨の日の楽しみ方。

日々の暮らしを楽しむということの豊かさ。

頬に感じる湿り気や、周囲を包む水音はにぎやかでありながら、静謐な雰囲気を感じさせるはずであったが、この日はどうも王宮その



ものがざわざわと落ち着かなかった。

時折侍従の廊下を走る靴音や、兵士が鎧を鳴らす音が響いているせいである。

「今日は、何かあるのかしら？」

いつもとは違う騒がしい空気に、木蘭は傍らに控える女官に問いかけた。

「王太子殿下がお戻りになられると、先ほど先駆けが参りましたの。一年ぶりの御帰還ですので、皆お迎えの準備で慌ただしくしております」

真国王真亮の子供は既に成人した王子が二人いることは、嫁ぐ前から聞かされていた。

今回遠征から戻って来るのは王太子である第一王子真駿しんしゅん率いる真国朱軍だという。

第二王子真凱しんがいも遠征に出ており、こちらはまだしばらく帰らない。

いつもの年でしたら雨の季節はもう少し後なので、こつも準備に手間取ることはないのですが、と女官は木蘭に頭を下げる。

いいのよ、と木蘭は謝罪を遮った。

ただ理由を問うただけで、そもそも責める気は全く無い。

王太子殿下がお戻りになられたならば、ご挨拶に伺うべきだろうか。酸味が強くできるように配合された香緋を飲みながら、木蘭は思いを巡らせた。

慶国で同様の事があった場合木蘭の出る幕は全く無い。むしろ関わってはいけなかった。

だが今は真国王の情けにより、曲がりなりにも妃と呼ばれるように

なった。

ならば真国王の恥とならぬように礼儀は尽くさねばならないのではないか。

しかし木蘭には自信が無かった。真国王の隣に立つことを許された女であるという自信が。

そんな状態で王太子に妃として挨拶など出来るであろうか。

木蘭は器に残っていた香緋を飲み干すと、散策することにした。

木立が濡れる様や雨粒が池を叩く音を聞いていれば、この騒がしい雰囲気も気にならなくなるだろう。

琳々だけを連れ、傘を持ち二人で庭園をそぞろ歩く。

こうして琳々と二人きりで人のいない庭園を巡れば、自然と慶国での日々に引き戻される。

ただ静かで、穏やかな、何も持っていなかった、何も望んでいなかったあの頃。

慶国で突然女官の訪問を受けたあの時からいくら経っていないというのに、

木蘭を取り巻くものは大きく変わってしまった。

「……不思議ね」

「……そうですね」

ぽつりと呟いた言葉に込められた気持ちを理解した琳々は困ったように微笑んだ。

木蘭は変わること慣れていない。

むしろ、変化など身体の成長以外にほとんどしたことがないのである。

父である慶国王に命じられるがままに真国へ嫁し、真国王の妃となった。

そして名ばかりではなく今、妃として遇されている。

慶国を出た時は、真国でも同じような日々が待っているのだと思っていた。

まるで庭園に植えられた木のように、ただそこにあればよいのだと。

立場だけが変わった。

木蘭自身は何も変わっていない。変わっていない。

自分なりに行動を起こしてもそれはあらぬ方向へと進んでしまう。何をしても全てが空回り。

木蘭の愚かに足掻いている様を、どう思っているのだろう。

怒っていないと言った、ただ優しく、ただ赦してくれるあの人は。

「この雨はあなたが降らせたのか」

知らず自分だけの思考の世界に入り込んでいた木蘭を呼び戻したのは、男の声であった。

驚き声の方を見やると、戦装束を纏った若い男が立っていた。

## 雨音 二

「何者!？」

琳々が鋭く言い放ち、傘を投げ捨て木蘭を男から庇うように抱き締めた。

男は明らかに西殿を警護する近衛兵とは纏う空気も装いも違った。

「……その者我を知らぬか。どうやら探していた方のようだな」

「下らぬ戯言など聞く耳は持ち合わせぬ! だれ、か……」

声を張り上げようとした琳々はそのまま木蘭へとしな垂れかかってきた。

その様子に驚き背後を見ればこちらも見知らぬ侍従がいつの間にか立っていた。

琳々は意識を失い、ぐったりと木蘭へ身を預けてしまっている。

「琳々に何を!」

「大人しくしてもらっただけだ。命に害は無い。心配はいらぬ」

男が顎をしゃくると、侍従は有無を言わせぬ強さで琳々を木蘭から引きはがしそのまま抱えて去っていく。

「琳々!」

木蘭の手から傘が滑り落ちた。

追いかけてよとすれば手を掴まれる。

知らぬうちに男は木蘭のすぐ傍まできていたのだ。

「……害さぬと申し上げた」

誰がそれを信じると思うのか。精一杯の敵意をこめて相手を見やれど男は無表情のままである。

まず目につくのは鈍い黒鉄色の髪。

そして不思議な青みを帯びた鋭い瞳。赤味がかった褐色の肌。頬には一筋の刀傷。

その手を身体ごと振り払おうと身動きしても男はびくともしない。

その装いに似合う武人であるのだろう。

では武人が自分に何を求めるのか。

木蘭は女で、目の前にいるのは男である。

見知らぬ男とただふたりきりになれば、脳裏を過るのは最悪の出来事。

「もちろんあなたにも、害成すつもりはない。慶木蘭殿」

少々お付き合い願おうと言われてても承知などしたくない。

しかし今の状態で否と言えは連れ去れた琳々はどうなるのか。

こうして腕を掴まれたせいだけではなく、木蘭は始めから男に抗う術を持っていなかった。

しかし男はあっさりと木蘭の手を離し振り返りもせず歩きだした。

ついてこいということであろう。

雨は少しも止まない。

ぱたぱたと雨粒が草木の葉を打つ音と男の鎧の立てる金属の擦り合う音が響く。

男は西殿の庭園をまるで知りつくしているかのように迷いなく歩い

た。

やがて道を外れ、建物から死角となる何も無い一角に辿りつくとうやく男は木蘭に振り向く。

表情は今だ伺えぬままである。

「どうぞ」

その場所は一見ただの茨の茂みであった。

だが少し屈むと、ぽっかりと空いた空間が目に入った。

どうやら元々東屋として建てられたものに茨がからみつき、本来の姿を隠してしまったものらしい。

元々この場所に誘うつもりであつたらしく、茶道具と菓子、それと手拭いが置いてある。

男は仕草だけで木蘭に着席を促すと、慣れた手つきで茶を入れ始め、あつという間に湯気の立つ緑茶と手拭いが木蘭の前に差し出された。

「乱暴な手段をとってしまい申し訳ない。

しかし私はあなたと二人きりになる必要があつたのだ」

男と二人きりで会うということが妃という位置にいる者にとってどういう意味を持つか、

男はわかつていて木蘭を連れ出したのであろう。

ならばその意図がわからぬうちは素直にその謝罪を受け取ることはいできない。

造りつけられた卓を挟んで真向かいにいる男の目的は一体何か。

何も価値のあるものを持ち合わせていない木蘭には自分自身しか思い当たるものが無いから、拒絶するように首を横に振った。

そこで初めて男の顔に表情が浮かんだ。

茶に手も触れぬ木蘭を口の端を歪め嘲笑い、木蘭へと差し出した茶

器を持ち上げると湯気のたつ程に熱い茶をまるで水を干すように一息で飲み込むと音を立てて卓へ茶器を置いた。

「害さぬと申し上げた」

低く、そして有無を言わせぬその口調に、思わず木蘭は身を竦ませた。

男はひとつ大きくため息を吐くと手拭いを取り自らの頭を乱雑に拭う。

「あなたも髪を拭いなさい」

だいぶ濡れているのだから、と指摘されてようやく木蘭はおずおずと目の前の手拭いを手に取った。

いつも琳々たちがしてくれるように、擦るのではなく髪を手拭いで挟んで軽く叩いて水気を取っていく。

脅えを隠さない木蘭を男は髪を拭うふりをしながら、じっと見つめていた。

湿り気を帯びたせいか、それとも元からか艶やかに揺れる黒い髪。瞳も同じ色の光を帯びている。その強い色の印象とは裏腹にほんの少し下がった瞼。

なめらかな象牙色の肌、染みひとつない卵型の顔かんばせ。小さな、それでいて赤い唇。

大陸の東の国で佳人と呼ばれるに相応しいであろうその姿。

遠い異国の姫。

王の寵愛手に入れた幸運な王女。

妃を失ったあの人の心を掴んだ、唯一の女。

### 雨音 三

男は一時見せた嘲笑をまた無表情の仮面の下へと隠してしまうと、木蘭の様子が落ち着くのを辛抱強く待つつもりであった。

自分の前にあつた手の付いていない茶を木蘭の前に置き、飲み干した茶器に新しい茶を注いでいる。

一体この人は何者なのか。男から目を逸らしながらも木蘭は必死で考えていた。

この西殿に堂々と入り込むことができ、尚且つ侍従を従えることが出来る人物はそういない。

しかし確信が無い以上、男の話を聞くしか手立てはない。

やがて覚悟を決めた木蘭が髪のを拭い終え戸惑いながらも男に向き直ると、男は一息に言い放った。

「単刀直入に申し上げよう。陛下との婚姻関係を解消して頂きたい」

男の要求は簡潔で、明瞭であつた。そして有無を言わせぬ強さも含んでいた。

青みを帯びた不思議な瞳に射抜かれてしまえば、すぐに「応」と言ってしまうようになる。

しかしそれは木蘭の自由になるものではない。

なぜなら木蘭の全てを決めるのは木蘭自身ではなく、真国王なのだから。

「……私から申し上げる事ではございません」

木蘭にはそう答えるのが精一杯であつた。  
しかし心の中は不思議に落ち着いていた。



自分が今とても相応しくない場所にいることは、重々承知していたから。

木蘭が真国首都或範へとやってきて、三ヶ月が過ぎていた。

王宮内では王の妃として扱われてはいたが、実は木蘭は真国で非常に難しいものとなっていた。

まず庶出の公にされていない子であるため対外的に慶木蘭という慶国の王女が存在するという証明そのものが存在しない。祖国である慶国も沈黙を守ったまま。

さらに真国へ嫁いできたといっても正式に国同士で取り交わした婚姻ではない。

そもそも慶国と真国には真つ当な国交が成立していないのである。今までその傍らに一時を慰める女すら置かなかった真国王が初めて迎えた女性ではあったが、慶木蘭という存在はただの平民よりももっと不安定なものであったのである。

彼女を守るものは正に真国王の寵愛のみであった。

そのことを木蘭は誰よりも早く深く認識していた。

西殿の者たちは木蘭に対して含むような態度を一切見せないし誠心誠意仕えてくれている。

しかし木蘭はその生い立ちから悲しい程に自らに関わる事柄を見抜く力を持ち合わせていた。

今どんなに妃として認められ、優遇されようといつか王の関心は他へ移る。

底辺からすくいあげられ、一時愛されて、そして捨て置かれるのであろう。

王という立場にあるものには不誠実ともとれる行いが許される。

木蘭の父こそがよい見本である。

なにしろそうして木蘭は生まれたのだから。

「あなたの祖国ではそうであろうな」

男は静かに、だが熱のこもった言葉を続ける。

「しかしあなたは既に真国の理の内このくに いんりにいる者。ならば選ぶのはあなたなのだ」

こちらから選ぶなど、なんと傲慢な振る舞いか。

木蘭は男の言葉に小さく首を横に振る。

女の方から男に離縁を申し込むなど、木蘭の常識からいくとあり得ない。

そもそも婚姻というものはそう簡単に解消されるものではないのである。

木蘭は正式に真国王の妃となっているわけではない。

だから木蘭が拒みさえすれば妃という立場から退くことが出来ると男は考えているようだった。

ただ、許されるうちは王の側にいたい。

それは誰にも打ち明ける事が出来ない切実な木蘭の望みであつたら、なおのこと木蘭から行動を起こすことはない。

全ては木蘭にとってのただ一人、真国王が選ぶ決める事だ。

真意を悟られることは、恐怖だった。

木蘭は与えられないことと奪われることの苦しみと絶望を知っている。

だから望むことが怖いのだ。恐ろしいのだ。それを知られることすら嫌だった。

「あなたが真国このくににおいて女性としての地位を望むのであれば、用意はある」

男は木蘭の答えを違う意味に受けとったようであつた。  
王の隣に立つことが許された者が持つ権力に未練があると。  
そんなものは木蘭にとってひとかけらの関心もなかった。

だが男は茶器を取りあげ、また冷ましもせずに一息で入れたばかり  
の中身を飲み干し言い放つ。  
木蘭の想像の範囲を超えた一言を。

「私の妻となればいい」

王の妃に匹敵する地位を与える事ができる人物。  
驚き目を見開いた木蘭に、男はまた口の端を歪めて笑つた。  
その表情をどこかで見た気がした。いや、見ている、いつも、見つ  
めている。

「……ようやくお分かりになられたようだな。我が名は真駿<sup>しんしゅん</sup>。  
一応この国で王太子と呼ばれる者だ。」

## 変化 一

真国王太子真駿。

このまま彼が次代の王となるならば真国はいずれ大陸の全てを手中に収めるだろうとまで言われる後継。

彼が王に代わって平らげた国は片手ではもう足りないはずである。名乗りを受け改めて真駿を見やれば彼の装いや雰囲気、話し方など答えを導く手掛かりは何一つ隠されていない状態であった。何よりも口の端を歪める笑い方、茶を一息で飲み込むその仕草が父親である真国王をまるで写したかのように瓜二つであった。

しかしその一方で拭い去れぬ違和感がある。

彼は表情や仕草こそ真国王を思い出させたが、決定的に違う部分があった。

髪の色と瞳の色、そして顔立ちである。

様々な容貌の民が暮らす大国真とはいえ、その多くの民は小麦色の髪をしている。

これは真国のみならず大陸の西、特に標高の高く荒れた場所に位置する国の多くの民は小麦色の髪と褐色の肌を持つ者が多いためである。もちろん個人や地域によって金に近かったり茶色に近かったりと差はあった。

縦断する大河と山脈をはさんでこの大陸は大きく西と東に分けられるが、西に行くほど肌の色は濃く髪の色は薄くなり、逆に東に行くほど髪の色は濃くなり肌の色は薄くなる。そして大抵の者が髪と同じ色の瞳をしている。木蘭もその例に漏れない。

ところが目の前の彼はどうであろう。鈍い鉄色の髪と青味を帯びた瞳はこの国では珍しい容姿とされるのではないだろうか。

しかし容姿が父と異なるから彼が偽物だと断じる事が出来ぬ程、纏

う空気は似すぎている。

ひと目見てわからないのだから、何も知らぬのであろう。

西殿の女官たちにはなかなか行儀のよい者が揃っているようだ。

木蘭の戸惑いを感じとり、真駿はまた口の端を歪め喉の奥で小さく嘲笑った。

何も知らぬなら、知らぬままでいい。

知らなければそれが罪だとも救いだとも気付かず穏やかに過ごせるはずだから。

「悪い話ではないだろう。今の王の妃か次の王の妃かの違いなど些細なものだ」

年齢的に考えても父と息子ならば息子である真駿の方が釣り合う。

しかし木蘭の表情は冴えない。

手拭いを握りしめ、真駿から視線を外すと、また小さく頭を横に振る。

小さな子供がむずがるような仕草に、真駿の眉が僅かに上がる。

木蘭の心の奥に秘められた恋を真駿は知らない。知る由も無い。

まるで書物で読んだ鳥の雛のようだと、木蘭は思う。

雛は初めて目にしたものを親と認識するのだという。

木蘭にとって真国王は琳々とその母以外に優しさと赦しをくれた唯一の存在なのだ。

優しくしてくれたから好きになるなんて、単純で浅はかかもしれない。

しかし気持ちは、想いは確かにここにあるのだから誰が何と言おうと、木蘭の心はすでに決まっている。

「……私は真国王陛下のものです。」

私の処遇をお決めになられるのは陛下をおいて他にございませぬ」

例え同然に扱われていても木蘭と真国王の間には何の約束も無いのだから自らを妃などと称することはできない。夫を自ら選ぶなどという権利など始めから有していない。

だが真国の王宮に足を踏み入れたあの時から、間違いなく木蘭は真国王の所有物であった。

揺るがない真実のみを告げる。木蘭は嘘を吐く器量もその材料も持ち合わせていないから。

しかし真つ直ぐに真駿の目を見て告げる事は出来なかった。青みを帯びた不思議な光を持つ瞳に心の奥に隠された想いを見透かされそうな気がしたせいだ。

政略の駒のひとつとしてやってきた庶出の王女が真国王を心から慕っていると思ってくれる者などいるわけがない。

思いがけず手に入れたものにしがみつく身の程知らずの女でいること。

それが木蘭にできる精一杯であった。

覚悟を決めて真駿に向き直るとその顔にあったのは仮面のような無表情ではなく、嘲笑でもなかった。

何か痛ましいものを見るかのように、眉間には皺がより目が細められていた。

「……自らは望む立場にないと仰るか」

「はい」

雨は止まない。さわさわと木立を打つ音は響き続けている。

## 変化 二

真国で女性は男性と遜色の無い権利を持っている。

財産を有し、政治や物事に関わることが当たり前のように認められているのである。

ただし家督を継ぐことだけが出来ない。

これはその家の根幹を成す血統というものは男性のみに受け継がれると考えられているからで、そのため息子に恵まれなかったとしても娘に婿を取って家を存続させていくという方法はとられない。

そして女性が家督を継げないもう一つの理由は死亡率の高さである。男性と女性の人生において最も大きな相違である出産は女性の平均寿命を大きく引き下げる。

それほど出産は女性の死因の多くを占めていた。

しかしその他において女性は男性と隔てなく扱われる。

王族や貴族のみならず結婚は一族として同盟関係を結ぶことであつたから、夫が妻を選ぶことができるように、妻は夫を選ぶことができた。

また同盟であつたから離縁も当たり前であつた。

一族の適齢期の者たちで複数対複数の見合いをして、相性のよさそうな者同士を結婚させるということも珍しくなかったのだ。

女性が嫁ぐ際には男性が独立する場合と同じように生家から財産を分け与えられる。

他の国ではそれが持参金として夫のものになるが真国では嫁した後妻の財産は妻のもののまま。

妻は夫の財産を継ぐことができたが妻の財産を受け継ぐのは子だけで、妻が子を産む前に死んだ場合は妻の実家に返却しなくてはなら

なかった。

妻を蔑ろにするということは妻の実家、すなわち姻戚を敵に回すということと同意であったため、よほど力関係に偏りが無ければ夫は妻を大切に扱う。

このように女性の地位が高く保護されているために正式な立場である妻と妾は厳密に区別されていた。

正妻となることで得る権利が大きいためである。

妾にも一定の権利は与えられはするがその子供、庶子には嫡子と同等の権利は絶対に得られない。

そのため真国では大陸では珍しい一夫一妻制が定着していた。

王と言えどそれは例外にならないため、妾に子供をいくら産ませて後も継ぎとはされない。

真国には妃と子供の住居はあれど後宮と呼ばれるものが存在しないのはこのためである。

いくら王の寵愛を得たとしても外戚として権力を得ることができないのは正妃を輩出した一族のみであるため、争うのは王の妃が決まるまでの間だけであったからだ。

20年の間真国王妃の座が空であったにも関わらず今まで国内でその座を巡る争いが起きなかったかというそうではない。

前王妃薫玉が亡くなった直後には当たり前のように争いは起きた。

しかし真国王が妃は不要と断言したこと、すでに後継となる2人の王子が存在したこと、さらに薫玉の生家である郭家の権力が絶大であったことですぐに鎮静化したのである。

現在周囲の者たちが真国王に妃を娶ることを薦めるのは単純に男には女が必要だという普遍的な考えによるものと、他国の干渉を抑えるためであった。

望んでいる男は二人いるのに女は一人。ならば選ぶのは女の方であ



ろう。

真駿の「既に真国しんごくの理ことわりの内うちにいる者ならば選ぶのは木蘭である」という考えはこの真国独自の風習によるものである。

独身男性が住居に女性を受け入れた場合、真国でそれは即座に婚約と同意となる。

木蘭が公けの存在でなくとも妃として遇されるのはこのためである。だから真国王は今まで様々な国からやってきた王女たちと会うことはあっても王宮に留まることは許さなかった。

王おっとが受け入れればその女は妃つまなのだ。

しかし真駿は真国王と木蘭の間で実質的な婚姻が成立していないことを知っていた。

だからあえて木蘭に取引のように話を持ちかけたのである。

慶木蘭という王女がその生い立ちから多くを望まぬ姫だということは知っていた。

だがここまで潔い返事が返ってくると真駿は想定していなかった。

生を受けた時から何もかも持ち合わせていたを前王妃薫玉と違う、祖国にさえ見捨てられた何一つ持たぬ王女木蘭。

大陸の東の国々において女性の地位はとても低い。

女性は常に男性に隷属するものであり、所有物であるという考えが強く根付いている。

酷い国では平民以下の女は家畜と同じ扱いの場合すらあった。

それはもちろん真駿も認識していた。

しかし木蘭は庶出といえど王族である。それが至極当然とばかりに自らの権利を完全に否定した。

まるで全てを諦めた奴隷のように。

真駿は驚きを隠せなかった。そして同時に感じたのは憐憫であった。今真国で妃として遇されていることは、紛れもなく木蘭個人の力によるものであるのに。

何も知らない方がいい時もある。だが、知らねばならないこともある。

彼女は知らなければならない。己の価値を。そうでなければ、あまりにも。

木蘭の黒い瞳が揺れる。

胸に湧き上がった不思議な感情に蓋をするように、真駿は木蘭から目を逸らした。

### 変化 三

「殿下は何をお望みなのですか？」

木蘭の問いかけに真駿は眉を顰めた。

しかし木蘭からすればそれは当然の疑問であつた。

「あなたが欲しい、ただそれだけだ」

相も変わらず表情を動かさないままに言い放たれる真駿の言葉に真実は感じられない。

「……私を手に入れても、殿下に利はございません」

木蘭は自分自身に価値があると微塵も思っていない。慶木蘭という個人のみならず慶国の王女としての価値も無いに等しい。ならばなぜ望むのか。

木蘭を得るためではなく、真国王から遠ざけたいのであろう。

もしも申し出を受けたとしても王太子妃となることはないだろう。

真駿はただ身の程知らずの女を排除したいだけだ。

木蘭は世間知らずの籠の鳥のような女だ。

だが籠の鳥だからこそ、傍観者でいられた。外の世界がどのように動いているのかを眺める事が出来るのだ。

自分が傍にいても、真国王のためになることはない。

それは他人に改めて言われるまでも無いごく当たり前の事実。しかし自分で思うのとは他者から真実を突き付けられるのでは訳が違う。離れた方がいいのかもしれないと思う気持ちも胸にあった。しかし木蘭はどこにも行き場が無いから真国に留ま<sup>とど</sup>まっているわけではない。

生まれて初めて湧いてきた、自らの望みを叶えるために、いる。

それ奪う者に抵抗する覚悟はすでに出来ていた。武器も防具も戦術も、何一つ持たないけれど。自分の望みを叶えるためなら、人は変わることが出来る。

「それは我が決めること。あなたはご自分を過小評価しておられるようだ」

「……もとより評価に値しませぬ」

真駿と木蘭の大きな違いは自分の行為が他者にどう影響するかを知っているか否かであろう。

木蘭のように生まれてから真国に来るまで空気の如く存在を無視され続けていれば、自分と他者との交わりがどういう風に物事を動かしていくかなど理解できない。

それゆえに木蘭の行動や思考は全て一方通行であった。真国王への気持ちにはひとつの曇りも偽りも無いが、真国王の心からの愛を得たいなどとは全く考えていなかった。得られるわけが無いと痛いほどわかっていいるから、他者から己の行動の反応があるなどと考えない。

しかし反対に真駿は自分の動作や態度で他者がどのように反応するか熟知している。他者が望むように振る舞い悟られぬうちに操ること、それは王太子として真国の後継として不可欠な技術であったからだ。

木蘭は真駿を恐れなかった。見知らぬ男に対する警戒心はあったが、名乗った後「王の子」という存在を違和感を持ちつつもそのままに受け入れた。

それは真駿にとっては新鮮な感動をもたらした。誰もが真駿の容姿について何か含む視線を寄こす。父とも母とも違う髪と目の色に。

目を逸らすのは怖いからではなく、何かを隠しているのだろう。しかし今隠しているものが何かまで探ろうとは思わなかった。

誰が泣こうと悲しもうと傷つこうとしなければならぬことがある。真駿にすれば木蘭のひとりの目的をつぶすことなど造作も無いことである。

奪うことは、いつでもできる。

何の罪も無い女を泣かすことだけはなるべくしたくないから、できれば木蘭自ら真駿を選んでほしい。望んだ女に選ばれることが真国の男の誉れだから。

不意に湿気た風が一筋東屋の中へ吹き込んだ。

気づけば湯気を立てていた茶はすっかりと冷めてしまっていた。

急いで仕損じてもどうにもならない。真駿からすればとりあえず今木蘭と二人きりで話すという目的は達した。

「今すぐに答えを出せとは申しませぬ。考えておいてください」

真駿はまた無表情の仮面をかぶり素っ気なく言う立ち上がり、木蘭に東屋を出るように促した。

強く降っていた雨は先ほどよりも弱くなっているようだった。

鼓のように葉を鳴らしていた雨粒は虫の音のように柔らかく変わっている。

「私の答えが変わることはありません」

木蘭は立ち上がり、今度こそ真駿の目を見て言い切った。これだけは、絶対に、変わらない。

怖い。

何しろ目の前の男は真国<sup>このくに</sup>において何もかもを持っている後継である。それに盾突くなど今までの木蘭であつたらあり得ない行動だ。ただ求めに応じればよいだけ。

しかしそれだけは、どうしても出来ない。したくない。

思つたよりも、簡単な女ではなさそうだな。

真駿は口元を歪めて笑つた。真国王が気に入つた理由が理解できた気がした。

何も持たない姫という認識は改めなくてはならないだろう。

ならば。

「では我はあなたを奪わなくていけない。陛下の腕の中から」

## 始まり 一

欲望とは足りないものを求める強い願いである。  
求める事柄が邪まなものであれ、正しいものであれ、人の行動の源になるということには変わりが無い。

国の始まりもまた同じ。

真国の始まりの場所は広大ではあったが樹木が育たずただ草が細々と生える荒地であり、荒野を転々とする遊牧の民であった。そして祖となった真・張・劉・楊・江・雅・周・朱・郭・淑・潘・史の12部族は少ない水や生活できる土地を奪い合う間柄であった。

この12の部族をまとめ上げたのが初代真国王真洌<sup>しんれつ</sup>。  
現国王真亮の曾祖父にあたる人物である。

1つの国となり無くなったかと思われた部族間の争いは結局尽きず、やがて真国は豊かな土地や資源を求めて他国への侵略を開始した。  
以後50年以上に渡って戦を続けている。  
そもそもこの大陸の戦乱の火種となったのは真という国が誕生する前、さらに別の国の出来事であったが、戦という炎に油を注ぎ続けたのは真国とであるとしても過言ではない。

生きていくために必要な資源を奪い合うという終わりの無い争いを長く続けていた真国の民は、大陸のどの国の民よりも戦に、人殺しに、略奪に慣れ、長けていた。

他国へ手を伸ばした真国は瞬く間に国を平らげ巨大化していく。

策略によって、力によって、敗者の血によって。

大陸の地図を大幅に書き換えた真国ではあったが、元は荒野をさすらう遊牧の民。

大陸の西の端で暮らしていた遊牧民がたった100年足らずで大陸の半分を掌握するまでに至っているのだ。手に入れた土地の統治を行う支配階級、すなわち貴族の数が平民と比べて圧倒的に少なかったのである。

彼らは背負えぬ財産を持たない。持つて歩ける分以上の財産は身に余るものなのでさっさと処分してしまう。いざ有事に大切なものは一族を繋ぐ命であり、次いで金や家畜といった動産、土地や建物などの不動産は例え一時奪われてもまた奪い返せるものだ。己の身に付け馬に積める以上のものに執着しては身を滅ぼすだけ。その意識は大多数の民が定住して数十年経った今でも変わることは無い。

故に真国で最も重視される投資は教育であった。

優秀な人材をいかにして育て、確保するかは各部族の力にそのまま結び付く。

真国で一番の財産とされたのは部族のために自分で考え動くことのできる人そのもの。

「東の花を如何にするか、そろそろはつきりさねばならん」

国を統べる役割を担う真家以外の11の部族もそれぞれに国を動かす役割を有している。

話の口火を切ったのは外交を担う雅家の当主であった。その一言で宴席はとたんに鎮まり返る。

今円座にいる王以外の部族長たちの一番の悩みの種は真国王が独断で招き入れた東の国から来た庶出の王女慶木蘭の処遇であった。

誰もが疑問を抱えながら生きている。生まれ、死ぬまでに何を残し、



何を成すかを手探りしながら。

生きるとは問い続けることなのかもしれない。伴侶を迎え、子を育み、記憶や財産を伝えていくことで命は続いていく。答えの無い問いを繰り返すように。

ごく当たり前の人としての営み。

それを放棄し続けた真国王がやっと選んだ女性と今だに清い関係だということに、部族長たちのみならず、周囲は驚き戸惑っていた。既に西殿へ迎えて三ヶ月。真国で婚約と同意であるこの行為に三ヶ月という時間は正式な婚姻へと変わるに十分な期間であったからだ。相手の年齢が若すぎて期間を置くということはあった。しかし木蘭は適齢期を遠く過ぎた20歳。子を産むということを考えれば一刻も早く名実が伴った婚姻を求められる年齢である。

「もう少し待ってみたらどうだ。王は気の長い方だ、そう急くこともあるまい」

先送りを示唆したのは財務を専門とする史家の長。彼は王家の支出が少なければ少ないほど良いと思う男だ。正式な婚姻となるとかかるものは莫大である。妃となる木蘭の性質を見極めるにはまだしばらく猶予が欲しいところだ。

「……我々はもう20年待った。あとどれくらい待てば気が済む？」

雅家の当主が含まれる棘を隠しもせず返せば、さすがに悠長なことを言ったと史家の長は素直に謝罪した。

長い間、部族長たちはあの手この手で新たな妃候補を真国王に押しつけ続けてきた。宥めすかし脅し泣き落とし、それでも真国王は変わらなかった。

当事者が変わろうと思わなければ他者がどう頑張ったとしても無駄なのだ。と部族長たちは半ば諦めていたが国内はよくても他国にそんな話は通じない。

まず正妃どころかたくさんの妃や妾が暮らす後宮が無いということが他国においてはありえないのである。

正妃の座など望まない、ただお側に侍る女を献上したいだけだと王のみならず二人の王子の分まで雨あられのように申し込まれ続けているのだ。

第二王子が成人してから、他国からの婚姻の申込みや女を送りたいという申し出は増え続けるばかりで、ただこれらを断るためだけの業務を専門とする者もいる程である。

そして今回他国から王女を迎えたということは瞬く間に大陸中に知れ渡り、今まで断ってきた国から再度申込が殺到していた。一度例外が生まれれば、後はもうなし崩しだ。もう今までの逃げ口上は通じない。

せめて木蘭が正式に妃となってくればまだ断り様もあるのだ。

「しかしかの花は庶子ぞ。王の花に相応いとは思えん」

誰もが反論できない一言を投じたのは第二王子の軍を束ねる劉家の長だ。

部族長たちが諸手を挙げて歓迎できない大きな理由が木蘭の立場の曖昧さとその出生である。

嫡子と庶子の差が厳格に定められている真国において、庶出という事実はそれだけで不適格とされるに値する。木蘭が西殿で暮らし始めてから3ヶ月、連日のように議論は続けられていたが、答えは今だ出ない。

「せめて王のお手がついていれば、まだ……」

ため息と共に呟いたのは法を司る潘家の長。  
そう、部族長がここまで静観していたのは、  
王の手だしを待っていたとも言えた。

## 始まり 二

一夫一妻制が定着している真国ではあったが、二番目・三番目の妻を持つ男がいないわけではない。多くの貴族には妾がいた。複数の妻とその子を養う財力と能力と、二番目以降となることを相手が了承しさえすれば、ではあるが。

逆に住居に女を迎えておいて追い出すような真似をすればその男の名誉は地に落ちる。受け入れるということは責任を伴うのだ。

真国王の行いは責任を果たしているとは言えない。木蘭の立場を曖昧にしているのは実は真国王その人であった。貴族の中から王の態度を非難する意見も近頃は聞こえてくる。

故に部族長たちは木蘭という存在を無視することが出来なかったのだ。

もしも王妃が健在であれば、木蘭は二番目の妃として特に異を唱えられることも無く受け入れられたであろう。むしろ歓迎されたかもしれない。何も持たない木蘭は真国内の権力争いに全く関係しないし例え愛玩動物のような扱いでも問題は無い。

正式な婚姻をしているかしていないかの差はそれほどまでに大きい。庶子として生まれた子は嫡子として生まれた兄弟の家臣となる。後継に優れた手足を用意するために第一夫人が身ごもると同時に第二夫人とも子を作ることとはさして珍しくない。第二妃となった木蘭と真国王の間に子供が生まれた場合数多ある例と同じように家臣として将来重用されただろう。

真国において誰を父とし、どの母から生まれてきたかという事実是非常に重視される。

結婚そのものが一族同士の契約であり、結果生まれた子供は二つの一族の財産を継ぐことができるからだ。一定以上の身分を持つ者に

とって正式な結婚というものは本人同士の感情のみでは済まない問題なのである。

そのため前王妃が生まれながらに妃と定められていたのは当然の理屈であつた。

後継である真亮誕生前後に生まれた郭家の女子は全てが妃候補であつたが、薫玉がそれと定められたのは郭家直系の娘として生まれたからに他ならない。

そもそもなぜ郭家が王妃を輩出すると決まっていたか。それは真国において最も重視されるのが同姓間の婚姻禁止、族外婚であるためである。

これは元々遊牧民族であつた真国の民が血の濃さによって引き起こされる弊害を熟知していたためで、何よりも禁忌とされた。

血と権力の集中を防ぐために王の妃を擁立できるのは一代限り。その後は三代待たなくてはならない。当時郭家と並ぶ力を持つ部族であつた張家と淑家はこの条件により資格を持たなかつたため、消去法のような形で郭家に権利が与えられたのだつた。

全ては定められている。生まれる前から、生まれてから、今までも。

なぜ真国王がその習わしに抗うようになったのか。

なぜ慣例に従わず二人の王子に妃がいないのか。

部族長たちの円座は王に次ぐ国の意思決定機関である。だが部族長たちは王に対して強制力を持たない。そして基本的に方針は満場一致となるまで話し合われる。本日も一致することなく終わりそうだ。

「お相手は王が望んだ方。それだけでよろしいでしょう」

呟いたのは税を管理する朱家の長。

それに同調する者は少ない。円座にいる者の大多数が王族の妃の座

を、国を左右する権力を諦めきれないのだ。永遠に埋まることが無い地位であるならばまだ我慢は出来た。

既成事実があれば円座の権限で内外に新たな妃の存在を示すことはできるだろう。

だがこのまま木蘭を受け入れることが真国<sup>このくに</sup>にとって、自分たちの部族にとって最良の道か。

議論は堂々巡りを繰り返すだけだ。

「よくはない。……どうやら東の花はとんだ名花のようだぞ」

吐き捨てるように反論したのは国土を整える楊家の長であった。

灌漑施設の整備や道路の建設を行う楊家と農産物や家畜を管理する朱家とは縁が深い。普段なら朱家の長の言葉に噛みついたりなどはないのだ。朱家の長は僅かに眉を上げたが、理由を知っているのだろう、黙って杯を傾けた。

「……どういうことだ」

しかし他の長たちにその理由が見当もつかない。痺れを切らして問いかけたのは郭家の長であった。

どうもこうもない。楊家の長は汚いものでも思い出すように言った。

「あの花を愛でるのは王おひとりではないとさ」

「何を」

「黒鉄<sup>くろがね</sup>のお方が随分とご執心だ」

真国の祖となった12部族は一見してわかるほど容姿に差が無い。今ではだいぶ混血も進み一概には言えないが小麦色の髪と褐色の肌

ではない者は元々他国の者を祖としている。

真国で貴族の地位にいるのは12部族とその縁族のみで、他国の民であつた者が国政に関わる地位を得る事はほぼ不可能であつた。従つて王宮に出仕することができる地位にある者のほとんどは小麦色の髪と褐色の肌をしている。鉄色の髪を持つ者は多くない。その中で黒鉄のお方と呼ばれるのは、ただ一人。

「……花を妃にと望んでおられる」

「馬鹿な」

郭家の長は手に持ったままであつた杯を取り落とした。息子が父の妻を望むことは許されない愚行だ。その逆もまた然り。

それはすなわち叛意を示すのだから。

### 始まり 三

「何を驚かれる。あなたの妹の子だ、そのくらい」

言葉が終らぬうちに冷たく空を切る音が響き燭台の明かりを反射して閃いた。

光は狂いなく楊家の長のうなじに向けられている。

「……今何と？」

円座を囲む部族長たち以外にもこの場にいる者がいた。真国王への絶対の忠誠を誓う監視者たちである。通常であれば彼らが円座に口を挟むことはまずありえない。ただ物のように静かにいるだけだ。

彼らが行動を起こすのは今のような      王を侮辱ともれる言動をした場合のみである。

彼らが剣を抜いたのは、王妃を貶められたからに他ならない。

「わかった！ と、取り消す！」

脂汗を滲ませて楊家の長が発言を撤回してようやく、監視者は刃を収める。

鞘と刃が触れ合う音が聞こえてようやく誰かが飲みこんでいた息を吐いた。

しかし郭家の長の目には、この一触即発のやり取りなどまるで見えではなかった。

なぜ遠征から帰ってきたばかりの王太子が王の妃を知っているのか。木蘭が真国にやってきたのはわずか3か月前であり、その頃王太子



は大陸を分断する大河のほとりにある国を攻略していたはずである。

「だが、僕は認めんぞ！」

男を誑かす毒を持つ花など王宮<sup>みや</sup>にはふさわしくあるまい」

刃を突きつけられてもなおそれとこれとは別とばかりに楊家の長の勢いは衰えない。

なぜ。

攻略の最中に木蘭が西殿へと迎えられたことを知ることがあったとしても、一度も顔を合わせたことのないだろう女を王太子が自分の妃にと望む意味がわからない。

もつとふさわしい縁談は履いて捨てるほどあったのだから。

木蘭を妃としても利が無いのは真国王も王太子も同じこと。しかし今西殿に木蘭がいる以上、王太子には利が無いどころかその身を滅ぼす火種にしなければならない。

ならばその火種を熾したのは、男ではなく女の方だと考えるのは、自然な流れだ。何も持たない庶出の王女どころか、父親と息子、二人を手玉に取る魔性の女だと。

何よりもわからないのはなぜ王太子が木蘭を望んでいるということ。を楊家と朱家の長が知っているのかということだ。

彼らの部族は元々武官よりも文官を多く輩出しており、国軍を率いる王太子との繋がりはそう強くない。

さらに”黒鉄の方”と呼ぶ様子からわかるように王太子に対して好感情を持っていない。何しろ母である王妃薫玉へ対する侮蔑を隠そうともしない程に。

そして楊家と朱家は始まりの12部族ではあるが、宰相である郭家よりも真国中枢から遠い。つまり部族としての力も劣るということである。

それなのに己の部族の能力に自惚れるわけではないが、郭家を差し置いて、なぜ。

「今宵はここまでにしておくべきだな」

冷え切った場を終わらせる一言を告げたのは、話を始めた雅家の長であつた。確かに話は全く別のものにすり替わってしまった。一体どうしてこんな事態になってしまったのか。

どの顔も言いたいことを飲み込んだままであつたが、杯を置き、腰を上げる。

やがて円座には郭家の長と、宴席では一言も発しなかつた張家の長が残された。

「郭の」

呼びかけておきながら張家の長の視線は郭家の長をとらえず、まるで遠くを見るように曖昧であつた。

言葉は問いかけというよりはただの呟きといった体で郭家の長へと届く。

「…… 20年前に絡まつた糸を解く時が来たぞ」

20年前、そう、全ては王妃薫玉の死から始まつたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7442/>

---

木蘭の涙

2011年7月9日05時19分発行